

あいさつの教育Ⅱ

——小中高における「あいさつ運動」と「クラブ活動・部活動」の影響——

島田博司

Greeting Education II: Impact of “School Greeting Campaign” and “Club Activities in Elementary School and Extracurricular Club Activities in Junior and High School”

SHIMADA Hiroshi

Abstract: The purpose of this paper is to demonstrate the role of the greeting campaign and the various club activities for greeting education in the courses of study for elementary, lower secondary and upper secondary schools, and to clarify the influence of the greeting campaign and the various club activities on greeting education, based on the self-history of greetings that students have reported.

The findings are as follows: 1) There are many cases where the greeting can be established by the greeting campaign and students participation in the various club activities. 2) At adolescence, many students tend to cease greetings for reasons of shyness and fear of neglect. 3) There are three reasons why they start to greet again themselves: the first type is those who have good feelings when greeting and being greeted by the people participating in the greeting campaign; the second type is those who don't mind not having their greeting returned; and the third type is those who meet people they admire and are encouraged to perform greetings.

Key Words: children's safety, greeting campaign, club activities and extracurricular club activities, moral education, special activities

要旨: 本論の目的は、「あいさつの教育」において、「あいさつ運動」と「クラブ活動・部活動」がどのような影響を与えたかについて明らかにすることにある。そのために、まず「あいさつ運動」と「クラブ活動・部活動」が小中高の学習指導要領でどのようにとり扱われているかを検討した。続いて、学生が報告した「あいさつの自分史」をもとに、「あいさつ運動」と「クラブ活動・部活動」の実態を明らかにした。

その結果、1) あいさつは、学校があいさつ運動をしていたり、生徒が部活動に参加したりすることでできるようになり、定着するケースが多いこと、2) あいさつは、思春期になると、恥ずかしさやあいさつしても無視されるのが怖くなって、自分からはしなくなりがちになること、3) 再び自分からあいさつをするようになるきっかけには、あいさつ運動や部活動で自分からせざるを得ない状況になってあいさつをする気持ちのよさを知った場合や、あいさつをするのにあいさつの返礼を必要としなくなった場合、さらには生き方の指針を示してくれるような重要な他者との出会いがあった場合などがあることがわかった。

キーワード: 子どもの安全, あいさつ運動, クラブ活動と部活動, 道徳教育, 特別活動

I. はじめに

1. 「あいさつ運動」への注目

子どもがあいさつをしなくなった、コミュニケーションがとれなくなったという。その際、人間関係の希薄化や防犯教育の効果について指摘されることが多い。

「あいさつの教育」の必要については、従来は「基本的生活習慣の形成」や「望ましい人間関係の育成」の文脈で語られてきた。これに加え、この 10 年あまりの間に生まれたのは、「子どもの安全」(犯罪対策・安全対策)にかかわる文脈である。たとえば、読売オンラインをチェックすると、平成 16 (2004) 年 7 月 2 日に「挨拶しない子供たち」の投稿¹⁾があり、7 月 3 日のレス投稿「私の周りにも」では、「小学校では見知らぬ大人はもちろん、顔見知りの大人でさえ気を許してついていかないと教えている様ですが、それには挨拶も含まれているのかなと考える事があります」とある。また、7 月 6 日のレス投稿「気にしないで」には、「〇〇さん、気にしないでね。というのも、最近は学校で知らない人から声掛けられても(挨拶でも)絶対に返事してはいけません…と指導されている所もあるのです。名札も付けるか廃止するかと言う事もありました。一中略一。なんか本当に最近ではギスギスし嫌なことです…」とあり、さらに 7 月 7 日のレス投稿「犯罪対策」では、「きっと犯罪対策ですよ!親に「知らない人に声をかけられても、返事をしてはいけません。」「知ってる人でも、子供同士しかいないときは、返事をしてはいけません。」って言われてるんですよ。だって、知り合いの小学生や中学生でも、声をかけて誘拐していくんですよ(こないだも女子中学生が男児をビルから突き落としましたよね)」とある。ここには、コミュニケーションがとれなくなったというより、コミュニケーションをとらなくなった理由として犯罪対策が背景にあることが見え隠れしている。

こうした投稿が登場してきた背景には、これらの投稿に相前後するが、その年の 3 月には群馬県高崎市の小 1 女児殺害事件が、同じく 11 月には奈良県奈良市の小 1 女児殺害事件が、翌平成 17 (2005) 年 11 月には広島県広島市の小 1 女児殺害事件が、同じく 12 月には栃木県今市市の小 1 女児殺害事件が起きたことがあげられる。事件を受けて、犯罪対策として子どもの安全を確保するための集団登下校や見守り活動の関心が高まり、その動きのひとつとしてさまざまな学校や地域で「あいさつ運動」を介しての見守り活動が活発化していった。

「あいさつ運動」についての文部科学省の動きとしては、平成 19 (2007) 年 9 月 5 日に開催された、第 54 回中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の資料『教育課程部会におけるこれまでの審議の概要(検討素案)【反映版】』の「3. 子どもたちの現状と課題」²⁾では、「文部科学省が実施したスクールミーティングでも、一中略一、コミュニケーションが取れなくなったといった子どもの変化を指摘する声も多く、子ども同士の「群れ遊び」などの交流、あいさつ運動、マナーアップ運動が有効との意見があった」とあり、望ましい人間関係づくりをすすめるひとつの手段として「あいさつ運動」が注目され、平成 20 (2008) 年度改定分の『小学校学習指導要領解説』では例示されるようになった。ただし、ここでは子どもの安全に関する記述はみられない。

2. 「あいさつの教育」の研究動向

ところで、加野は、あいさつをはじめとするマナーについての関心が高いものの、これまでマナーに関する本格的な研究はあまりにも少なく、内容的にも乏しいと述べている。そして、「マナー」の研究は教育学にとって重要な研究課題であるとの理解から、教育の問題として考えれば、問題意識は人々がどのようにマナーを身体化するかにあり、〈人間形成〉の問題と親和性があることを指摘している³⁾。

そして、このスタンスのもと、教育社会学の加野らと教育哲学の矢野らがまとめた研究成果は、加野芳正編『マナーと作法の社会学』(東信堂、2014)と矢野智司編『マナーと作法の人間学』(東信堂、2014)という形で結実している。そこで加野は、マナーの研究の 5 つの視点(意義)として、①人間形成にとってマナーや作法とは何であるか、②マナーや作法は歴史のなかでどのように現われ、変質していったか、③マナーのもっている社会的機能はなにか、④マナーはどのような状態にあり、どう守られているか、またマナーをどう育てていくか、⑤マナーはどのように伝達され、共有されていくのか、の 5 つをあげている⁴⁾。

これらの研究成果を受け、苫野は「マナーや作法についての本格的な人文社会学の研究は、極めて少ないのが

現状である」と指摘し、今後探求されるべき問いとして「「純粹贈与」としてのマナーを可能にする条件は何か」をあげている⁹⁾。

3. 本研究の概要

1) 研究の目的

本稿では、こうした社会状況と研究状況をふまえ、「人間形成と社会化」という視点からとりわけ道徳的社会化における「礼儀」の教育に着目し、子どもたちの「基本的な生活習慣」や「望ましい人間関係」を育成する内容としての「あいさつの教育」の現状と課題について、あいさつの教育に直接的に関与しているものとして「あいさつ運動」を、また規則を守り礼儀正しくふるまうことを学ぶ場のひとつで、あいさつの教育に間接的に関与している「クラブ活動・部活動」の2つをとりあげ、明らかにしようとしている。

2) 研究の方法

このために、平成 29 (2017) 年度の大学新入生を対象として、「あいさつの教育 (社会化)」がどのように行われてきたかを検討することにする。

まずは、フォーマルな教育として『学習指導要領』に注目し、彼らが受けてきた「あいさつの教育」が小学校から高校までの学校教育の場でどのように位置づけられているかを、「道徳教育」と「特別活動」にスポットライトを当てて明らかにする。その際、彼らが受けてきた教育内容を把握するために、小学校では4年生までは平成 10 (1998) 年度改定の、またその後は平成 20 (2008) 年度改定の『小学校学習指導要領』を、中学校では平成 20 (2008) 年度改定の『中学校学習指導要領』を、高等学校では平成 20 (2008) 年度改定の『高等学校学習指導要領』をとりあげ、それぞれ検討していくことにした。

続いて、彼らが記述した「あいさつの自分史」をもとに、「あいさつ運動」と「クラブ活動・部活動」という2つの観点から内容分析することで、あいさつがどのように身体化にされていったかを解明していくことにする。このために、平成 29 (2017) 年度の前期に開講した「人間関係論」の授業で、授業の一環として家庭や学校、さらには地域などでこれまでに受けてきたあいさつ指導の実態について、「あいさつの自分史」として自分の気持ちや行動の変化をできるだけエピソードを交えて紹介しながら 400 字程度 (多くても、800 字程度) のレポートにまとめてもらったものを用いることにした。その際、レポートを調査資料として提供できるかについて尋ね、提供は本人の自由であること、提供しないことでいかなる不利益も被らないこと、資料はすべて匿名扱いになることを説明し、提供への同意を得た人のもののみを利用することにした。

自分史作成日時は、4月のことである。なお、資料提供に協力してくれた学生は 115 名で、今回は新入生であることと字数条件として 400 字以上を設定し、それをクリアした 108 名 (93.9%) 分を調査対象とした。

Ⅱ. あいさつ運動～『学習指導要領』上の位置づけ

学習指導要領では、礼儀に関連して、あいさつは、とりわけ「あいさつ運動」はどのように位置づけられているのだろうか。

『学習指導要領』ならびに『学習指導要領解説』において、教育内容として「基本的生活習慣」や「礼儀」としてのあいさつがとりあげられ、そのねらいや内容、指導の観点、方針などが主として記載され解説されているのは、小学校と中学校の「道徳教育」の領域である。

また、「あいさつ運動」に焦点を当てるとき、基本的な生活習慣の形成や望ましい人間関係の育成を図る分野として小学校から高等学校までの「特別活動」の領域、なかでも小学校では「学級活動、児童会活動、クラブ活動」が、また中学校と高等学校では「生徒会活動」が重要である。

1. 「道徳教育」の領域

道徳では、学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養おうとしており、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、

計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、道徳的実践力を育成しようとしている。

1) 『小学校学習指導要領』の場合

◎小学 1 年生から 4 年生まで

平成 10 (1998) 年度に改定され、平成 14 (2002) 年度から施行された『小学校学習指導要領』では、あいさつは「主として他の人とのかかわりに関すること」の項目でとりあげられ、その内容は学年ごとに記載されている。低学年 (1・2 学年) 対象の部分では、あいさつについて「気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する」と明示されている。中学年 (3・4 年生) 対象の部分では、あいさつについて明記されていないが、低学年のあいさつの記載があった内容に対応する部分では「礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する」となっている。

また、『小学校学習指導要領解説 道徳編』の「内容項目の指導の観点」では、低学年だけでなく中学年でもあいさつについての記述がみられる。まず低学年では、あいさつについて「他の人とのかかわりにおける基本的な生活習慣の形成に関するものであり、状況をわきまえて真心のこもった適切な礼儀正しい行為ができる児童を育てようとする内容項目である」と述べられ、さらに「よい人間関係を築くには、まず、気持ちの良い応対ができなければならない。それは、さらに真心をもった態度と時と場をわきまえた態度へと深めていく必要がある」とされている。留意点として、「特にはきはきとした気持ちのよいあいさつや言葉遣い、動作などの具体的な指導を通して明るく接することのできる児童を育てることが大切である」が指摘されている。

続いて中学年では、低学年からの発展として「この段階においては、相手の気持ちを自分におきかえてとらえることができ始める。あいさつにしても、相手の気持ちに応じた対応ができるようになる。そのことを十分考慮して、礼儀の大切さを指導する必要がある。しかしまた、この段階は、気の合う友達同士で仲間集団をつくりがちであるため、特にだれに対しても真心をもって接する態度を育てることが重要である」と表現されている。

◎小学校 5, 6 年生

平成 20 (2008) 年度に改定され、平成 23 (2011) 年度から施行された『小学校学習指導要領』において道徳は、平成 21 (2009) 年度から先行実施された。あいさつは、前回の改定と同様、「主として他の人とのかかわりに関すること」の項目で学年ごとに記載されており、各学年とも内容に変更はない。

高学年 (5・6 年生) 対象の部分では、あいさつについては、中学年同様、直接明示されていないが、該当部分には「時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する」と述べられている。

ところで、『小学校学習指導要領解説 道徳編』の「内容項目の指導の観点」では、前回記述のなかった高学年でもあいさつはとりあげられている。高学年では、中学年からの発展として「この段階においては、特に礼儀作法について正しく理解し、時と場をわきまえた適切な言動が求められる。この段階は、礼儀の意義については理解できていても、恥ずかしさなどもあり、時として心のこもったあいさつができない場面も出てくるのが考えられる。礼儀の形にこめられた相手を尊重する気持ちを考えさせることなどを通して、自然な言動として相手の立場に立って心のこもった接し方ができるように指導していくことが大切である」とされ、心のこもった行動が重視されている。

それから、「その他の教育活動における指導」の「日常的な生活の場面における指導」においては、「日常生活の全体が児童の道徳性をはぐくむ機会である。学校における授業以外の日常的な生活の場面には朝の始業前、休憩時間、放課後の時間などのように児童が自由に行動できるものと、給食の時間、朝や帰りの話合いの時間、清掃の時間などのある一定の行為が課されているものがある。しかし、児童にとっては、授業と比べてどちらもありのままの姿を出しやすい状態におかれ、教師と自由に話すことのできる機会も多い」と述べられ、「この場を活用し、児童の実態を把握したり、児童の発達段階や特性等に応じて、あいさつなどの基本的な生活習慣、礼儀等の生活上のきまり、人間としてしてはならないことをしないことなどを身に付けたり、教師と児童及び児童相互の人間関係を深めたりすることが大切である」とされている。

さらに、「家庭や地域社会との連携」の「家庭や地域社会との連携による道徳教育」においては、「多様な連携

の創意工夫」として「家庭や地域と一体となって道徳性を高める実践活動を推進する」があがっており、「地域全体で、生活習慣や礼儀、社会生活上のモラルを身に付けるなど、道徳性を高める実践活動を推進することが考えられる。方法としては、早寝早起きや食事に関する生活習慣等を身に付ける活動、あいさつを促す運動、リサイクルや地域清掃等の環境美化にかかわる活動などがあり、地域の実態に応じて取り組まれる。また、地域が全体としていくつかの約束事や標語を決めて掲示するなど、心を育てる環境づくりをすることも考えられる。特に、情報メディアの急速な普及に伴う問題が子どもの心の成長に負の要因になっているといわれる現在、子どもの心の健全育成に大人の責任として対応していくためにも、地域の人々全体の意識の向上にもつながる活動や運動に協力していくことが求められている」と述べられ、「あいさつ運動」がとりあげられている。

2) 『中学校学習指導要領』の場合

平成 20（2008）年度に改定され、平成 24（2012）年度から施行された『中学校学習指導要領』において道徳は、平成 21（2009）年度から先行実施された。「あいさつ」という言葉は直接的には使用されていないが、「主として他の人とかかわりに関すること」の項目で、「礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる」とあり、小学校の高学年の指導の発展として礼儀の重要性について記載されている。

ところで、『中学校学習指導要領解説 道徳編』では、礼儀の基本は、「相手を一個の人格として認め、相手に対して敬愛する気持ちを具体的に示すこと」にあり、「心と形が一体となってはじめてその価値が認められる」と述べられている。そして、「敬愛の気持ちを伝えるためには、相互に承認された一定の形が必要になり、具体的には言葉遣い、態度や動作として表現される。これは人間関係や社会生活を円滑にするために創り出された優れた文化の一つということができよう」とされるが、「どれほど形ができていたとしても人間尊重の精神がなければ礼は通じないし、「相手を思う気持ちがあったとしても、時と場にふさわしくない言動は人々の間では受け入れられないであろう」とある。

そして、中学生の学習課題として、「中学生の時期は、礼儀の大切さについてある程度理解し、言葉遣いや行動の仕方もある程度身に付きつつあるものの、まだ十分習慣化しているとはいえない」ことを指摘している。また、「この時期は、一般的な傾向として、従来からのしきたりや形に反発する傾向が強くなったり、照れる気持ちやその場の状況に左右されたりすることによって望ましい行動ができなくなることも見受けられる」ことから、指導にあたって注意を喚起している。

そこで、指導のポイントとして、「日常生活において、時と場に応じた適切な言動を体験的に学習する」こととされ、その際「形の根底に流れるその意義を深く理解できるようにすることが大切である。また、逆に、心情面を整えることによって形として外に表すことができるようになることもある。このことを十分に踏まえて、時と場に応じた適切な言葉遣いや行動がとれるよう、特に内面的な指導を重視する必要がある」と指摘している。

また、全体的な記述としては、「総説」の「道徳教育改訂の要点」における「道徳教育改訂の趣旨」の「改善の具体的事項」において、「道徳教育にとっても家庭や地域社会の果たす役割は重要であり、様々な学校教育活動について学校、家庭、地域が相互に結び付きを深める中で、道徳教育については、例えば、生活習慣や礼儀、マナーを身に付けるための取組などが家庭や地域社会において積極的に行われるようにその促進を図ることが重要である」と説かれている。

さらに、「教育活動全体を通じて行う指導」の「その他の教育活動における指導」の「日常的な生活の場面における指導」においては、「学校における授業以外の場面として、朝や帰りの学級の時間、休憩、給食、清掃、部活動の時間などがある」とされ、なかでも「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動は、スポーツや文化及び科学等に親しみ、自己の個性や能力を発見し、伸ばすことができ、道徳の内容にかかわっても責任感、連帯感の涵養等に資するものである。異学年生徒との出会いや学校外の人たちとの交流の場でもあり、お互いに協力し助け合ったり、規則を守り礼儀正しく振る舞ったりする必要がある。また、仲間や指導者との協同的な活動を通して自己理解や自己受容、自己実現を図る場でもある」と述べられ、部活動と礼儀の教育の関連が示されている。

2. 「特別活動」の領域

特別活動では、望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養おうとしている。

1) 『小学校学習指導要領』の場合

あいさつへの言及は、平成 10 (1998) 年度改定分ではないが、平成 20 (2008) 年度改定分にはある。そこで、平成 10 (1998) 年度改定分でも、平成 20 (2008) 年度改定分で基本的な生活習慣の形成や望ましい人間関係の育成に関する内容としてあいさつへの言及があった、「学級活動、児童会活動、クラブ活動」をチェックしてみたい。

なお、学級活動は基本的な生活習慣の形成と望ましい人間関係の育成の両方で言及されているが、児童会活動とクラブ活動は望ましい人間関係の育成でのみの扱いとなっている。

◎小学 1 年生から 4 年生まで

まずは、「学級活動」である。平成 10 (1998) 年度に改定され、平成 14 (2002) 年度から施行された『小学校学習指導要領』では、あいさつが該当する記述は、「内容」の「学級活動」の「日常生活や学習への適応及び健康や安全に関すること」において、「希望や目標をもって生きる態度の形成、基本的な生活習慣の形成、望ましい人間関係の育成、学校図書館の利用、心身ともに健康で安全な生活態度の形成、学校給食と望ましい食習慣の形成など」としてとりあげられている。

『小学校学習指導要領解説 特別活動編』の「各内容の特質とその指導」の「学級活動」の「学級活動の活動内容」と指導計画の「学級活動の活動内容」の「日常生活や学習への適応及び健康や安全に関すること」の「基本的な生活習慣の形成」では、「持ち物の整理整頓、衣服の着脱、言葉遣いなど基本的な生活習慣にかかわる問題は、児童の実態に応じて適切に指導することが大切である。これらの指導は、ともすると、教師の一方的な説話のみになりやすいので、児童の実態や発達段階に即して、具体的な資料を活用して児童の理解を深めるなどの工夫をし、日常生活の実践に結び付く効果的な指導を行うよう配慮することが大切である」と記載されている。あいさつについては、直接明示されていないが、基本的な生活習慣の形成や望ましい人間関係の育成がその内容に該当する。

他方、「児童会活動」と「クラブ活動」だが、このときの『小学校学習指導要領』には基本的な生活習慣の形成や望ましい人間関係の育成に関する内容はいずれも記載されていない。

◎小学校 5, 6 年生

平成 20 (2008) 年度に改定され、平成 23 (2011) 年度から施行された『小学校学習指導要領』で、特別活動は平成 21 (2009) 年度から先行実施された。あいさつが該当する記述は、「各活動・学校行事の目標及び内容」の「学級活動」の「内容」のなかにある〔共通事項〕の「日常生活や学習への適応及び健康安全」の「基本的な生活習慣の形成」における「日常生活や学習への適応及び健康や安全に関すること」において、「希望や目標をもって生きる態度の形成、基本的な生活習慣の形成、望ましい人間関係の育成、学校図書館の利用、心身ともに健康で安全な生活態度の形成、学校給食と望ましい食習慣の形成など」としてとりあげられている。あいさつについては、前回の改定と同様、直接明示されていないが、基本的な生活習慣の形成や望ましい人間関係の育成がその内容として該当する。それは解説書を読むと、はっきりとする。

『小学校学習指導要領解説 特別活動編』の「各活動・学校行事の目標及び内容」の学級活動の「学級活動の内容」の「日常生活や学習への適応及び健康安全」の「基本的な生活習慣の形成」では、「持ち物の整理整頓、衣服の着脱、あいさつや言葉遣いなど基本的な生活習慣にかかわる問題は、幼稚園・保育所との接続に配慮し、児童の実態に応じて適切に指導することが大切である。これらの指導は、ともすると、教師の一方的な説話のみになりやすいので、児童の実態や発達の段階に即して、具体的な資料を活用して児童の理解を深めるなどの工夫をし、日常生活の実践に結び付く効果的な指導を行うよう配慮することが大切である」と記載されている。

さらに、「望ましい人間関係の形成」では、「今日の子どもに見られる問題行動として、いじめ、不登校、暴力行為などが指摘されている。これらの問題行動の遠因として、家庭や地域社会などにおける子どもの人間関係の希薄化に伴う対人関係の在り方の未熟さが考えられる。このような問題行動を解消するとともに、一人一人の児童の健全育成を図るためには、様々な人間関係を体験させることが必要である。学校の生活においても、教師と児童、児童相互の間に信頼・尊敬・親愛・協力など、温かい人間関係が育成されていないところでは、児童の学級への所属意識も薄くなり、人間関係にかかわる様々な問題が発生している」とし、教師は「就学前教育における人間関係に関する内容などの教育や道徳の時間の「主として他の人とのかわりに関すること」をはじめとする道徳教育と関連させ、日ごろから一人一人の児童と密接な人間関係を保ち、望ましい人間関係を築く態度の形成に努めるとともに、学級活動においても適切な内容を取り上げて効果的に指導する必要がある」とされ、就学前教育や道徳教育での「あいさつの教育」と関連させて指導することを強調している。

他方、「児童会活動」と「クラブ活動」については、「内容の取扱いについての配慮事項」の「学級活動、児童会活動、クラブ活動の取扱い」の「人間関係を形成する力を養う活動を充実すること」で、「発達の段階に即した人間関係を形成する力については、一中略一、特別活動における実践活動や体験的な活動を通して、一中略一考えを深め、望ましい認識をもてるようにするとともに、その大切さを児童自身が実感できるようにし、実際の集団活動の中で実践できるようにすることが考えられる」とし、その際「児童会活動やクラブ活動、学校行事などにおいて、地域の人々と、触れ合ったり会議をしたりする活動や、あいさつや言葉遣い、正しい敬語などを活用してコミュニケーションを図るような交流活動」を一層重視することが大切であるとされ、あいさつが明示されるとともに、道徳同様、特別活動でも全体的に記述量が増えている。

なお、ここには「あいさつなどを通してコミュニケーションを図るような交流活動」という記述があり、道徳教育には「あいさつを促す運動」とあったように、学習指導要領では、「あいさつ運動」をはじめとする、あいさつに関連するさまざまな交流活動を促している。

2) 『中学校学習指導要領』の場合

平成 20 (2008) 年度に改定され、平成 24 (2012) 年度から施行された『中学校学習指導要領』で特別活動は、平成 21 (2009) 年度から先行実施された。そこにはあいさつの記載はないが、あいさつに該当する記述は、「各活動・学校行事の目標及び内容」の「生徒会活動」の「目標」に、「学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる」としてとりあげられている。

そして、『中学校学習指導要領解説 特別活動編』の「各活動・学校行事の目標と内容」の「生徒会活動」の「生徒会活動の内容の取扱い」の「よりよい生活を築くための諸活動の充実」には、「生徒会活動においては、学校生活における課題を解決したり、学校生活をよりよくしたりするための、生徒の自発的、自治的な諸活動を充実させる必要がある。そのためには、生徒会を構成する各組織が、校内の生活規律の充実や美化活動、あいさつ運動や遅刻防止運動など、具体的な目標を立て、よりよい学校生活づくりに参画するような取組を推進することが必要である」とあり、ここに「あいさつ運動」の記述をみることができる。

3) 『高等学校学習指導要領』の場合

平成 20 (2008) 年度に改定され、平成 25 (2013) 年度から年次進行で施行された『高等学校学習指導要領』で特別活動は、平成 22 (2010) 年度から先行実施された。

なお、『学習指導要領』も『学習指導要領解説 特別活動編』も、内容的には中学校のものと同様記述となっている。

Ⅲ. あいさつ運動が児童・生徒に与えた影響～「あいさつの自分史」の内容分析

では、「あいさつ運動」は、子どものあいさつ行動にどんな影響を与えたのだろうか。

1. 体験者数

小中高の各学校段階で、あいさつ運動をどれくらいの学生が体験しているのだろうか。全体的にみると、体験者は 69 名 (63.9%)、未経験者は 39 名 (36.1%) となっていた。おおよそ 3 人に 2 人が体験している数字がでている。

もう少し詳しくみてみよう。各学校段階の体験者は、小学校が 44 名 (40.7%)、中学校が 38 名 (35.2%)、高校が 18 名 (16.7%) となっていた。このうち、特定の学校段階でのみ体験した人は、小学校のみが 25 名 (23.1%)、中学校のみが 12 名 (11.1%)、高校のみが 6 名 (5.6%) であった。また、複数の学校段階で体験した人は、小中で 15 名 (14.0%)、中中で 8 名 (7.4%)、小中中で 4 名 (3.7%) となっていた。

2. 特定の学校段階でのみの体験者の場合

まずは、あいさつ運動を特定の学校段階でのみの体験した人の記憶をたどってみよう。なお、本文で自分史レポートに記載された文章を紹介する際、趣旨を変えない範囲で書き直している場合があることを予め留意していただきたい。また、各項の末尾には〈記述一覧〉を掲載しているので、参照していただきたい。

1) 小学校でのみ

あいさつ運動のあるなしにかかわらず、「なにも考えず、無邪気にしていた」人が 3 名 (2.8%) いた。

そうではなく、あいさつ運動に巻き込まれることによってできるようになったという記述がけっこうある。たとえば、「門でのあいさつ運動で、できるようになった (児童会活動で・高学年の児童で・クラスの全員参加で)」が 4 名 (3.7%)、「門以外でのあいさつ運動があった (標語づくり・あいさつ回り・宿題)」が 3 名 (2.8%)、「朝の放送があった」が 1 名 (0.9%) いた。

また、自分があいさつ運動をする側になってできるようになったという記述もけっこうあり、「あいさつ運動をする側になり、できるようになった (児童会活動で・班登校で)」が 4 名 (3.7%)、「あいさつ運動に自主的に参加した (ボランティア活動で・好奇心で)」が 3 名 (2.8%) となっていた。

とはいえ、あいさつできるようになったからといって、「上級生になるとしなくなった」が 1 名 (0.9%) いるように習慣化できた人ばかりではない。ただ、そういう人も「上級生になるとしなくなったが、運動をする側になってできるようになった」が 2 名 (1.9%) いるように、改めて運動をする側になってできるようになったという回想もあった。

こうしてみると、あいさつ運動はいいことばかりのようだが、「あいさつ運動は、しつこくて怖くて嫌いだった」という指摘した学生も 3 名 (2.8%) いた。

例外的なものとして、学校以外の場の「地域の子ども会であいさつ運動をしていた」が 1 名 (0.9%) いた。

〈記述一覧〉

◎なにも考えず、無邪気にしていた (3 名)

* 小学校にあがると、旗当番のお母さんなどにも積極的にあいさつができ、学校でのあいさつ運動なども元気よくしていた。小さいときは、あまりまわりのことを深く考えなかったのも、あいさつに対してもなにも考えずにできていた。

* 小学生のときは、今より無邪気で素直だったと思う。そのため、家族にはもちろん、学校の先生やあいさつ運動でたっているお母さんたちにも元気よくあいさつをしていた。学校の先生からは元気よくあいさつをすることを教えられていたので、今では考えられないくらい元気よくあいさつしていた。

* 私の小学校にはあいさつ運動というのがあり、登校の時間に校門の前に当番の子たちと先生がたってあいさつをしていた。このときも、確かに私はあいさつをしていた。

◎門でのあいさつ運動で、できるようになった (児童会活動で・高学年の児童で・クラスの全員参加で) (4 名)

* 私の通っていた小学校では、児童会という生徒の組織が毎朝メンバーをローテーションさせながら門にたち、あいさつ運動をしていた。最初は素通りしていた生徒も、あいさつをかえす人が増えるにつれ、あいさつをしない方が恥ずかしいことだという雰囲気になり、最後にはみんながあいさつをしていた。

- *私が通っていた小学校は、「あいさつ日本一」を目指している学校だった。毎朝、校長先生・先生方・高学年生徒が門の前でたって、登校してくる生徒たちに元気よく大きな声であいさつをしていた。「あいさつ日本一」の目標がなかったときはあいさつする生徒がとても少なかったが、その目標ができてからはほとんどの生徒があいさつするようになった。そのおかげで、あいさつすることが自然と身につくようになっていった。
- *私が通った小学校では、代々6年生は朝校門の前にたって登校してくる人たちにあいさつするという決まりがあった。はじめは朝早くいくことがとてもイヤで、あいさつはするものの、なんでいかなダメなのかなあ、あいさつに意味があるのかなと思っていた。だが、イヤイヤながら行って友達と並んであいさつしていると楽しくて、あいさつをかえしてもらったときにはとてもうれしかったのを覚えている。登校時間がおわってクラスのみんなど教室へ帰るときは、朝から笑顔ですがすがしい気持ちになった。そこから、あいさつをすると、気持ちよくその日をすごせると思った。
- *「あいさつの自分史」と聞いて、私はまず、小学校のころのあいさつ運動を思い出した。私の通っていた小学校にはクラス全員参加で行う、あいさつ運動というものがあった。門の近くにたってあいさつするという単純なものだったが、クラス全員でやるものだったので、門を通る児童はイヤでも30人の子とあいさつしなければいけなかった。そのおかげか、あいさつをまったくしない児童はいなかったことを覚えている。最初は当番制で、6人くらいでやっていた運動だった。そのころは、もちろんあいさつをかえしてくれる子もいたが、おしゃべりにふけてあいさつを無視する子や、つまらない顔をして素通りする子が出て、私はなんのためにあいさつ運動をしているのだろうと疑問だった。しかし、なにがきっかけだったかは忘れたが、いつの間にかクラス全員強制参加のあいさつ運動となっていた。そのあいさつ運動のおかげか、私はあいさつすることに恐れは感じなくなっていた。さすがに「だれにでも」は無理だったが、知らない近所の人や何回かみかけたことのある人には自分からあいさつできるようになっていた。

◎門以外でのあいさつ運動があった（標語づくり・あいさつ回り・宿題）（3名）

- *私があいさつについて意識しはじめたのは、小学校のころである。私が通っていた小学校は、田舎のこぢんまりとしたところにある小さな小学校である。全校でも100人ぐらいの少人数のこの小学校では、あいさつ運動にとっても力をいれていた。あいさつ運動の種類は、主に3つある。ひとつ目は、春に進級して少ししたころ、ある宿題が担任の先生からだされるのである。それは、あいさつに関する標語づくりである。あいさつを呼びかける内容の五七五の標語を、1年生から6年生までが提出するのである。標語が集まると厳選されて、地域の方が看板にその標語を手書きで書いてくださり、地域のあらゆるところにたててくださるのである。なので、登下校する間にみかけるし、その標語看板には学年と名前が書いてあるので、自分の作品があるとうれしく感じたのであった。2つ目は、正門の前にたって、あいさつをすることである。高学年になると当番制で当番の日は朝早くに登校して正門にたって登校してくる生徒にあいさつをするのである。少人数な学校だったため、全校で行う行事も多く、全校生徒の顔と名前はみんながほとんど把握していたので、正門にたってあいさつをするのは憂鬱というより、むしろ楽しかったのである。3つ目は、あいさつ回りと呼ばれる運動である。朝登校すると、1年生の教室から6年生の教室を回って、部屋のなかにいる人に向かって、おはようございます！と元気よく行って回る運動である。どの学年も1クラスずつしかなかったので全学年ですするのに5分ぐらいしかかからなかったし、他学年との交流が毎日できるので楽しみのひとつでもあった。
- *私の通っていた小学校では、あいさつを児童にさせるためにある宿題をだした。その宿題というのはいろいろな人にあいさつをして、あいさつカードにサインをもらい、提出するものである。そのころはまだあいさつをする意味がわからず、正直面倒くさい宿題でやれといわれたからやるという感じであった。でも、あいさつをしていくうちに、あることに気がついたのである。1回あいさつをした人から、そのあいさつ以降、高確率で2回目のあいさつをしてもらえるようになったのである。あいさつをされたら、当然あいさつをかえす。そうしていくうちに、最初は強制的にさせられていたあいさつが、自分からすることに変わっていったのである。その体験からあいさつはさせられるものではなく、お互いが気持ちよく生活をスタートさせるためのコミュニケーションなのだという考えが変わった。そのことに気づいた日から、相手にあいさつされるより早くあいさつをするようになったのである。
- *私は、幼稚園のころから今に至るまで、目上の人や地域の方々にあいさつをすることを心がけている。一番記

憶にあるのが、小学校で行っていたあいさつ運動である。月に何回か、今日は何人、だれとあいさつできたか紙に書いてだしたりもしていた。私にとってあいさつとは、心がけるというより、自然と当たり前にするものだ。

◎朝の放送があった(1名)

*私が通っていた小学校では、朝の時間に「おはよう、おはようございますという朝の気持ちのいいあいさつは、その日を楽しい1日にしてくれます」という放送が流れていた。6年間聞いたその放送は、私の頭に深く残っており、今でもだれかにあいさつをするときにたまに思い出すことがあるが、私に気持ちのいいあいさつをすることで1日が少し楽しくなるということを教えてくれたと思う。

◎あいさつ運動をする側になり、できるようになった(児童会活動で・班登校で)(4名)

*小学生のとき、計画代表委員会の委員になった。この委員会では、主に学校全体の運営にかかわる仕事をしていて、その仕事のなかにあいさつ運動があった。人にあいさつをすることが苦手だと思っていたので、はじめはこれが苦痛で仕方なかった。けれど、実際やってみると、私があいさつすることで相手も笑顔でそれに応えてくれる。それがうれしくてたまらなかった。これをきっかけに、あいさつすることが好きになった。勝手に苦手だと思いこんでできなかったあいさつが、今では自ら笑顔でハキハキとできるようになった。

*私は、小学校で児童会に入っていた。メンバーは5人、小学校をよりよくするためにはどうすればよいか、いつも意見をだしあい思案していた。実施したものの中に、あいさつ運動がある。「この学校は、あいさつが少ない。あいさつをすると、それだけで明るい気持ちになり、1日を気持ちよくスタートできるだろう」ということからはじまった。正直、みんなより学校に早く登校して、校門の前にたち、「おはようございます」と大きな声でいうのは恥ずかしいし、少し面倒くさかった。活動がスタートした直後、その照れから私は小さな声しかでなかった。どうせちゃんとあいさつしてもかえしてくれる人なんて少ないし…、と自分に言い訳していた。しかし、なかなか成果がでない。登校してくる生徒も、たいていみんな恥ずかしがって、頷くだけや目をそらしたりして気持ちが暗くなっているようで、逆効果にみえた。「このままじゃだめだ」と、児童会で話しあった。自分たちももっと大きな声をだして、一人ひとり笑顔を向けることにした。恥は捨てて実践したところ、最初は校門で朝から大声で叫ぶ児童会員を笑う人もいたが、だんだんみんな「おはようございまーす！」と大きな声であいさつしてくれるようになったのだ。あいさつをかえしてくれると、ただ素直にとてもうれしくて、また別の生徒にもっと笑顔であいさつする。これがあいさつのパワーなのかと思った。あいさつはすごいと思った。

*物心がついたときからあいさつができるのは、小学生のときにしていたあいさつ運動のおかげなのかなと思ったりもする。私はあいさつ運動の係になっていて、毎朝校門の前であいさつをしていた。そのとき、やっぱりあいさつはかえしてもらえた方が気持ちのいいものだと思っし、逆に自分からあいさつをするのもとても気持ちがいいと思った。だからそれが、私があいさつをするきっかけのひとつであると思う。

*私の小学校では、定期的にあいさつ運動があり、地域の方々が通学路にたったり、学校の正門に先生がたくさんたったりして、大きな声であいさつをしていた。班登校で6人班のメンバーの班長が大きな声であいさつをしてくれていて、私はいつも口パクで誤魔化していたのである。しかし、その班長が、あいさつ運動の日に欠席した。私は副班長だったため、代わりにあいさつしないと思い、勇気をだしてあいさつをしたのである。すると、先生から「いいあいさつだね！」とほめられ、それがとてもうれしくてちょっとずつであったが、私はあいさつのできる子へ変わっていった。

◎あいさつ運動に自主的に参加した(ボランティア活動で・好奇心で)(3名)

*小学校では、「あいさつ隊」というものがあり、自主的に参加した。週に一度は朝に校門の前にたち、先生や生徒に大きな声で朝のあいさつをしていた。

*私が家族以外の人に対して恥ずかしがらずに自然とあいさつができるようになったのは、小学校のころからである。私は「あいさつ運動」兼「ゴミ拾い」のボランティアをしていたことがきっかけで、同い年の友達だけでなく、上の学年の人にも恥ずかしがらずにあいさつすることが身についた。学校の教育方針自体も、あいさつをしっかりするというを大事にしている、当たり前にあいさつをすることには時間がかからなかった。

*私の学校では朝、児童会のメンバーが校門の前であいさつをすることが恒例であった。この活動にちょっとし

た変化があったのは、私が高学年になったころだった。児童会ではない同級生のひとりが校門であいさつをしていたのだ。あとで理由を聞いてみると、たまたま朝早く着いてとくにすることもなかったから参加したのだという。すると、小学生によくある好奇心からであろうか、翌日になるとひとり、2人と増えていき、気づけば道路にはみだすほどであった。最終的には、あいさつ運動に参加することが私の学年の流行りになっていた（私も友達と参加していた）。早起きをすることは少し大変だったが、あいさつをかえしてもらえたときの喜びはなんともいえないうれしさでいっぱいだった。

◎上級生になるとしなくなった（1名）

*毎朝、学校へ登校すると児童会の人たちや委員の先輩方、先生方も正門のところにたっており、あいさつ運動をしていた。また、校舎内でも先生とすれ違ったときにあいさつをし、帰りの際にも「さようなら！」とあいさつをしていた。小学校1年生のときに、6年生の人が先生に向かってあいさつしている姿に私は驚いた。声をださずに、目もみず軽い会釈をしているだけだった。当時、1年生だった私には、そのあいさつの仕方が理解できなかった。なぜ1年生の私でもできるあいさつができないのだろうと。けれどそれは、私が6年生になったときにやっとわかった。そのときには、1年生の子たちをみて、元気だなあと思うようになっていた。きっとあのときの6年生の人も、今の私と同じような気持ちだったのだろうと思うと、人間の成長は不思議だと思った。

◎上級生になるとしなくなったが、運動をする側になってできるようになった（2名）

*私が通っていた小学校では、毎週月曜日に児童会と高学年の各クラスの学級委員が校門の前であいさつ運動を行っていた。校門の前にいくと、大きい声で児童会の人たちがあいさつをしていた。私も児童会の人たちにあいさつをかえすと、ニッコリと笑顔でかえしてくれた。そのとき、私はとてもうれしかったと同時に、あいさつをすると自分の気持ちも穏やかになることがわかった。このとき以降、あいさつをすることがあったが、高学年になっていくとあいさつが面倒になってきていた。小学生5年生になったとき、私は学級委員になった。児童会の決まりで、今度はあいさつ運動に参加する側になった。最初は恥ずかしかったが、あいさつをしていくとだんだん楽しくなってきた。「初心、忘るべからず」という言葉があるが、まさにその言葉どおりだと思った。

*私が入学した小学校にはあいさつ運動があり、あいさつはするものだと教えられた。そのときは自分からするのではなく、あいさつされたらするというもので、あいさつはしなければならないという、少しダルいような気持ちでしていたのである。しかし、6年生のときに図書委員の代表としてあいさつ運動に参加することになり、朝は校門の前にたち、先生、友達にもあいさつを率先してする見本のような運動をしていた。最初はイヤイヤだったが、運動をしているうちにあいさつをかえされるのがうれしくなり、それがきっかけで友達が増えることがあったので、自分から進んであいさつするようになった。

◎あいさつ運動は、しつこくて怖くて嫌いだった（3名）

*私が通っていた小学校は毎週水曜日があいさつの日で、校門の前には先生方やPTAの方々がたっていたり、休憩時間中はあいさつ委員の人たちが回ってきてあいさつを交わしたりといった習慣があった。「毎週毎週、しつこいわ」と思いながらも、習慣だから仕方なくやっているようなところもあった。

*私の小学校では、毎週月曜にあいさつ運動があり、月曜日には校門の前に委員会に入っている生徒がたつのだ。そこを通ると、みんなが私を目がけていっせいにあいさつしてくるので、それが怖かった。

*私の通っていた小学校では、月に一度「あいさつ週間」と称して、1週間、学校の教師やPTAの親たちが門の前で登校してくる生徒にあいさつをし、あいさつの重要性を訴えたりくみがあった。正直に言って、私はあいさつ週間が大嫌いだった。低血圧でイライラしているなか、毎朝大きな声であいさつをかえすことを強要されるのだ。あいさつの大切さがわからない私があいさつ週間を嫌いになることは、不可抗力のことだった。

◎地域の子ども会であいさつ運動をしていた（1名）

*小学生のころ、私は子ども会という市の自治団体に入っていた。月に2回、公園の掃除とあいさつ運動をしていた。

2) 中学校でのみ

まずは、「あいさつ運動以前に、あいさつができるようになっていた」が 1 名 (0.9%) いた。

きっかけはさまざまだけど、あいさつができるようになった人として、「オアシス運動で、できるようになった」が 1 名 (0.9%)、「あいさつ運動をする側になり、できるようになった (生徒会活動で)」が 2 名 (1.9%)、「あいさつ運動に自主的に参加した」が 1 名 (0.9%)、「ある先生との出会いに感動し、私をできる人に変えた」が 1 名 (0.9%) いた。ここでは、できるようになった理由に、あいさつ運動への参加を促したある先生との出会いをあげた人がいたが、自分にとっての理想モデルとなる他者との出会いが指摘されていることは注目される。

それから、どちらかというあいさつをしなくなったケースとして、「自分からはあいさつしなくなった」が 2 名 (1.9%)、「あいさつ運動やあいさつすることの意味がわからなかった」が 1 名 (0.9%)、「あいさつの意味はわかっていたつもりだったが、お題目にすぎなかった」が 1 名 (0.9%)、「自分からはあいさつしなくなっていたが、あいさつ運動に自主的に参加したことで再びできるようになった」が 1 名 (0.9%) いた。このうち、自分からはあいさつしなくなっていたが、再びできるようになった人は 1 名にすぎず、できる人とできない人に二分化するるとともに、する人はする人のまま、しなくなった人はしなくなったままという様子が浮かびあがってくる。

〈記述一覧〉

◎あいさつ運動以前に、あいさつができるようになっていた (1 名)

*私の中学校では、あいさつ運動も行っていた。小 5 で陸上競技をはじめまでは、先生や委員の人にあいさつをされても目をあわせることができなかつたり声が小さかつたりしていたが、驚くほど変わって、先生にあいさつが元気でできていとほめられるほどになっていた。

◎オアシス運動で、できるようになった (1 名)

*私の通っていた中学校では、オアシス運動という朝のあいさつ運動を行っていた。オアシス運動とは、「お」はおはよう、「あ」はありがとうございます、「し」は失礼します、「す」はすみません、という意味で、その頭文字をとった運動である。オアシス運動を通じて、生徒が自主的に礼儀正しくなることを学んでいくのである。あいさつをすることで、生き生きと学校生活を楽しむことができるのである。あいさつは、自分も相手も心が弾むということを知ってからは、積極的に声をかけはじめた。オアシス運動が私のなかでとても大きかった。

◎あいさつ運動をする側になり、できるようになった (生徒会活動で) (2 名)

*私は、中学 2 年生と 3 年生の 2 年間、生徒会役員を務めた。毎日生徒が校門にたつあいさつ運動をしていたが、役員の仕事にあいさつ運動があり、私は毎週木曜日の朝校門にたち、活動をしていた。この活動をしていたことにより、あいさつをしたときのすがすがしい気持ちを知り、自らあいさつしようと考えようになった。

*中学校にあがると私は、ボランティア委員会にはいった。そこでは、朝のあいさつ運動や募金活動などが行われていた。募金活動では、近くの駅の入り口に並び大きな声であいさつをし、募金を呼びかけた。あいさつをして、相手の人がかえしてくれるとうれしい気持ちになり、それだけで 1 日が楽しくなった。

◎あいさつ運動に自主的に参加した (1 名)

*中学校にあがり、あいさつが徹底されはじめた。クラス対抗でどのクラスが一番よいあいさつができるのか競ったり、部活でも「テニスができるようになるよりも前にあいさつができるように」と指導されたりし続けた。そのおかげで私はあいさつの気持ちよさを知り、私は自分から朝のあいさつ運動に参加したり、なにものもないときは朝教室に入ってくる人みんなにあいさつをしたりするようになった。あいさつを通じて、自分自身が明るく活発になっていくのを感じた。

◎ある先生との出会いに感動し、私をできる人に変えた (1 名)

*あいさつと聞いて思いだすのは、中学校のときのことだ。そこで出会ったひとりの熱血系の先生に人生を変えてもらったといっても過言ではない出来事があったのだ。先生は、私たち生徒に全力でぶつかってきた。「あいさつしたら友達が増えるぞ!」「あいさつ運動してみよう!」。先生は毎日、一人ひとりの生徒に「おはよう!」「さようなら!」と元気に全力であいさつをしていた。もちろん最初はみんな、内心では、あの先生、面倒くさいなあと思っていたけど、あんなに生徒に本気であいさつするって、相当な気力だな、すごいなと感心しはじめたのだ。最初はイヤがられた先生も、先生のあいさつを聞くと、1 日シャキッとすくらしい大切になった。

私の心が感動し、動いた音がしたのだ。これは、私、変われると思ったのだ。それから早かった。確かに勇気がいることだったけど、私は毎朝あいさつをみんなにすることにした。朝掃除をしている近所のおばさん、毎朝犬の散歩をしているおじいちゃん、近所で飼われている犬、門にたっている先生方、あの私を変えてくれた先生。この出来事のおかげで習慣がついて、高校でもあいさつのおかげで友達ができ、大学でもたくさんできたのだ。あいさつは偉大だ。あいさつは私を変えてくれたのだ。

◎自分からはあいさつしなくなった (2名)

*中学生のときには、風紀委員が朝のあいさつ運動を行った。自分からあいさつをすることがなくなってきたのに気づきはじめてのは、そのころだ。どうしてだろうと今考えてみると、そのあいさつ運動のせいかもしれないという考えに至った。相手からあいさつしてくれることが当たり前ようになってしまったのだ。そして、自分からあいさつをする習慣もなくなってしまった。

*中学校では、生徒会の人たちが積極的にあいさつ運動を行っており、校門前で毎朝登校してくる生徒一人ひとりにあいさつをしていた。私自身もあいさつをされれば、かえすように努力していた。しかし、自分からあいさつをするという行為をしようとは思えなかった。なぜなら、無視されるのが怖かったためである。

◎あいさつ運動やあいさつすることの意味がわからなかった (1名)

*私の出身中学校では、「オアシス運動」という運動をしていた。オアシスの「オ」は「おはようございます」、「ア」は「ありがとうございます」、「シ」は「しつれいします」、「ス」は「すみません」の頭文字をとったものである。たとえば、「おはようございます」では、毎朝先生方や、生徒会、風紀委員の人たちが校門にたって、登校してくる生徒にあいさつしていた。中学生のころは、そんなことしてなんの意味があるのか、なぜあいさつをしなければいけないのかわからなかった。

◎あいさつの意味はわかっていたつもりだったが、お題目にすぎなかった (1名)

*私が通っていた中学校では、風紀委員があいさつ運動していた。1年生のころに私も風紀委員になり、担当の週にはいつもより少し早く家をでて校門にたち、あいさつをした。父があいさつに厳しく、あいさつをしなければ叱られたし、それが大切だとわかっていたつもりだったが、そのころの私は、ただあいさつ運動の時間に「おはようございます」とくりかえしていただけたように思える。

◎あいさつ運動はあったが、避けていた (1名)

*私が通っていた中学校にはあいさつ週間というのがあって、毎朝生徒会長の方が門の前にたって登校してくる生徒にあいさつを大きな声ですするという、あいさつ運動をしていました。中学生や高校生のころは、あいさつを大きな声ですということに少し恥ずかしさがありました。だから、無視されるのが怖くて、あいさつを避けてきました。

◎自分からはあいさつしなくなっていたが、あいさつ運動に自主的に参加したことで再びできるようになった (1名)

*中学生になると、少しずつ恥ずかしいという感情が生まれ、相手の目をみず、素っ気ないあいさつをするようになった。それは家でのあいさつもいっしょだった。そのころから、母親に「相手の目をみて、気持ちをこめてあいさつすること!」といわれるようになった。そこで、通っていた中学校のあいさつ運動に、友達といっしょに参加した。同じ学校の人や地域の人を相手に、笑顔で元気よくあいさつをするというのが目的だった。当たり前のように感じるが、中学の私には恥ずかしさもあり、それをこなすのが難しかった。しかし、1週間、運動に参加したことによって、少しずつ自然と笑顔で、元気よくあいさつができるようになった。自分が気持ちいいあいさつをすれば、かえてくるあいさつもとても気持ちよく感じた。「おはよう」、たったこのひと言を元気よくいうだけで、相手との距離が縮まり、いい気分になれる。まるで、魔法のような言葉だと気づいた。

3) 高校でのみ

あいさつ運動があって、あいさつをされることでできるようになったものとして、「門でのあいさつ運動で、できるようになった」が1名(0.9%)いた。

他方、自分が「あいさつ運動をする側になり、できるようになった(生徒会活動で・部活動で)」が3名(2.8%)となっていた。

また、「まわりに流されて適当にしていた」が1名(0.9%)いた。

小高連携の試みといってもいいのかもしれないが、「生徒会活動として、小学校の朝のあいさつ運動に参加した」が1名(0.9%)いた。

なお、この時点であいさつをしなくなったという記述はみられなかった。

〈記述一覧〉

◎門でのあいさつ運動で、できるようになった(1名)

*私の通っていた高校では、毎日門の前に先生がたち、くる生徒全員にあいさつをしていた。あいさつ運動の期間には、生徒会の人たちもたち、先生といっしょにあいさつをしていた。毎日毎日、門の前で先生にあいさつをすると学年の違う先生でも教科の違う先生でも、校内で会うと話をするくらい仲よくなれ、先生とのかかわりも深くなった。この経験から私は、あいさつはコミュニケーションをとる上で欠かせないものだと考えるようになった。

◎あいさつ運動をする側になり、できるようになった(生徒会活動で・部活動で)(3名)

*高校生では風紀委員となり、朝のあいさつ運動を行った。そこでは、気持ちよくあいさつをかえしてくれる人、適当にかえしている人、なにもいわずに会釈だけする人がいた。このとき、私はあいさつの仕方ひとつで、こんなにも気分が変わるということを感じたのである。友達や家族、顔見知りの人にもあいさつをすることで、自分もまわりも笑顔になれ、元気になれるだろう。あいさつというのは、最高の言葉である。元気の源でもある。相手からのあいさつを待つのではなく、自分からあいさつをしていくことが大切であると考えようになった。

*最近、あいさつをする生徒が少なくなってきているということで、高校3年生が手本となるようにいわれ、あいさつ運動を行った。それによって、私自身もあいさつの習慣が付き、学校の外でも自然とあいさつができるようになった。やはりあいさつをされる側もする側も、笑顔で爽やかにあいさつすることで、その日を気持ちよくすごせるのだと、あいさつ運動をして実感した。

*私の高校は、毎月部活動が順番に替わって朝の校門の前につれて、あいさつ運動を行っている。私も実際に行ったことや受けたことがある。最初はあまり生徒たちもあいさつしても反応がかえってこなかったが、自分たちも笑顔であいさつをしているうちに、かえしてくれる生徒が増えていった。私があいさつを受ける立場になったときも、面倒くさそうにしている生徒より、笑顔であいさつをしている方が気持ちも明るくなった。

◎まわりに流されて適当にしていた(1名)

*高校時代は、授業のはじめのあいさつでだれも声をださなくて、先生に怒られながら何度もやり直しをしたり、生徒会の役員の人が校門の前につれて朝のあいさつをしたりしているにもかかわらず、大半の生徒が目をおろさずにお辞儀だけをして通りすぎていた。私もそのなかのひとりである。まわりが適当にしているから自分も同じようにすればいいと思っていたし、まわりと違うことをするのは恥ずかしいことだと思っていた。

◎生徒会活動として、小学校の朝のあいさつ運動に参加した(1名)

*私は、高校3年間、生徒会として活動してきて、ある小学校で朝のあいさつ運動もしました。小学校だったので、年もすぐ離れていて、あいさつしたらちゃんとかえしてくれるかなとか不安に思いながらあいさつしてみたら、元気にあいさつしてくれた記憶があります。なかには恥ずかしがってあいさつをしない子がいたり、するけど目をみないであいさつする子がいたりしました。高学年になるとカッコつけてあいさつする子などさまざまな仕方があるんだなと思いました。

3. 複数の学校段階での体験者の場合

続いて、あいさつ運動を複数の学校段階で体験した人の記憶をたどってみよう。あいさつ運動の期間が長くなることは、どんな影響をもたらすのであろうか。

1) 小中で

まず、小中での体験者を見てみよう。「小中とあいさつ運動が盛んで、習慣になっていた」が4名(3.7%)い

る一方で、「中学に入り、自分から積極的にあいさつすることがなくなった」が5名(4.6%)いたり、「中学に入り、まわりがあいさつをかえしてくれなくなり、悲しい思いをした」が1名(0.9%)いたりして、中学校に入ってあいさつをしなくなった様子が浮かびあがってきている。理由としては、大声をだすことの恥ずかしさがあげられている。

とはいえ、「中学に入り、大きな声であいさつするのが恥ずかしくなっていたが、あいさつ運動をする側になり、できるようになった」が2名(1.9%)いるようにあいさつする側に回ったり、「小学校高学年のことから大きな声であいさつするのが恥ずかしくなっていたが、ある女子中学生との出会いでできるようになった」が1名(0.9%)いるようにある人との出会いがあったりして、恥ずかしさを乗り越えてあいさつするようになったという報告もある。

また、「まわりに流されてあいさつをしていた」が1名(0.9%)いた。

〈記述一覧〉

◎小中とあいさつ運動が盛んで、習慣になっていた(4名)

*私の通っていた小学校、中学校では、あいさつ運動が行われていた。なかでも中学校では、「あいさつ日本一」のスローガンのもと、あいさつ運動を行っていた。私は中学1年生のころ評議員だったため、あいさつ運動を中心になって実行していく立場となったことがある。その際に自分からあいさつをし、相手からあいさつがかえってきたときはとてもうれしくて気持ちがよかったことを覚えている。この経験から、自分からあいさつをすることがより習慣づいていったのである。

*小学校、中学校のころは、委員会の人などが朝校門にたつてあいさつをするあいさつ運動があったり、帰りのHRでは全員で「さようなら」をいったり、あいさつをする習慣を染みつけられる期間だと思った。もし小学校、中学校時代にあいさつの習慣がついていなかったら、今でもあいさつできないままかなと思うので、ありがたい習慣だったと思う。

*私の住む地域では、幼稚園から中学校ではあいさつは大切なこととされ、校門の前に先生や生徒会がたつてあいさつをするなど、あいさつ運動が盛んであった。そのため、幼稚園児から中学生ぐらいまでの子どもはよくあいさつをするのである。

*小学校にあがったとき、クラス全員で「あいさつで明るいクラス!」と学級目標を決めた。担任の先生は、「おはよう」や「こんにちは」などをいうと、お互いに気持ちがよくなるよといい、あいさつの重要性を説き、勧めた。あいさつをすると、みんな笑顔になることがなによりもあいさつのいいところである。地元の中学に入学し、あいさつ運動の経験をした。朝早くに登校するのは大変だったが、おかげで充実した時間をすごせた。

◎中学に入り、自分から積極的にあいさつすることがなくなった(5名)

*私の通っていた小学校では、児童会が定期的にあいさつ運動を行っていたので、あいさつすることが大事だと知ったのはそのころである。中学校でも同じような運動があったが、思春期の恥ずかしさのようなものが邪魔をして、小学校のころのような素直な心であいさつができていなかったとふりかえってみて思う。

*小学校で児童会を3年しており、活動の一部にあいさつ運動があった。あいさつ運動とは、毎日児童会がたすきをかけて正門にたち、登校してくる生徒にあいさつをするという運動だった。低学年はあいさつをかえしてくれたが、高学年は会釈をするだけだった。自分自身も5年生くらいからあいさつをすることはかっこ悪いという雰囲気が友達のなかであり、そのころからあまりあいさつを自主的にしなくなった。中学校に入り、生徒会のあいさつ運動やあいさつ週間があったが、思春期ということもあってまわりにあわせることが多く、友達も自分も積極的にあいさつはしなくなった。

*小学校では、あいさつをしようという全学年共通の目標が、校内の至るところに貼りだされていた。校内にやってきた来客の方にも、廊下ですれ違うたびにあいさつをしていた。中学校のときには、あいさつ運動というものがあった。朝の登校中に、学校の門の前に先生たちがたっている。これも、あいさつをかえすまで、先生たちはしつこく下駄箱の前までついてくる。こうしたことがあり、私は次第にあいさつをするということが、面倒になった。あいさつの大切さよりも、そういったまわりの反応の方がイヤだという認識が自分のなかでできてきた。

- * 小学校にあがると、学校に向かう途中の交差点などに地域の方がたっぺいらっしやるようになった。指導されたという覚えはないが、私は、地域の方にはあいさつをきちんとしなければならぬ気がして、毎朝あいさつをしていた。学校でもあいさつ運動というものがあるが、児童会の人たちや先生方があいさつをするよう呼びかけていた記憶がある。中学校でもあいさつ運動は続き、定期的にあいさつをするよう呼びかけられた。私は、あいさつをしたくないわけではなかったが、あいさつされたらかえしていたし、友人にもあいさつをしていたが、あいさつ運動はあいさつを強制されている気がしたこと、その期間だけ校門前であいさつをする生徒会の人たちの声がやたらとうるさく聞こえ、好きではなかった。私は大きな声をだすのが苦手だったので、あいさつをしても気づいてもらえなかったといった経験が重なり、このころからあいさつが苦手になった。
- * 私は小学校で、委員活動としてあいさつ運動を行っていた。そのころはなぜそのような活動をするのかかわからないまま、ただただあいさつをくりかえすだけだったが、そこであいさつをかえされたときのうれしさは未だに覚えている。また、中学校でも、風紀委員会という委員であいさつ運動を行っていた。学校は、かなりあいさつ運動を大切にしていた。自分は、はじめは義務的な感じで行っていたが、再びあいさつをかえされるうれしさに気づきはじめ、次第にそのあいさつ運動が楽しみになっていた。笑顔であいさつをかえされると、それだけで1日が明るくはじまる。あいさつとはすごいもので、あいさつを交わすだけで笑顔になれた。しかし、いつしか自分からはあいさつをしなくなっていた。それまでは自分からしてきたが、いつの間にか受け身の体勢に入っていたのだ。無視されたらどうしよう、とマイナスな考えばかりをもってしまった。その考えがあいさつをあまりしなくなった原因につながっていると思う。

◎中学に入り、まわりがあいさつをかえしてくれなくなり、悲しい思いをした (1名)

- * 大阪市の公立の小学校に通っていたのだが、高学年の代表委員の各クラス2名は、月に1週間校門の前であいさつ運動をすることになっていた。私も6年生の1年間経験したのだが、はじめは自分の後輩にあたる、知らない下級生にあいさつをするのは気恥ずかしく声もなかなかでなかった。だが、1年間すごしていくなかで、慣れと私を知らないだれかにあいさつを笑顔でかえしてもらえるうれしさから、進んであいさつができるようになった。中学生になっても私は、1年生のはじめ風紀委員会に所属し、あいさつ運動を行っていた。しかし、中学生の私と同年代の生徒たちは知らないふりをして素通りしていくことが多く、見返りを求めているわけではないが、小学生のころはみんなが笑顔でかえしてくれていたのもあり、悲しい思いをすることが多かった。

◎中学に入り、大きな声であいさつするのが恥ずかしくなっていたが、あいさつ運動をする側になり、できるようになった (2名)

- * 小学校に入学すると、門のところに先生や上級生がたっぺいらっしやるという思いからあいさつ運動という活動が頻繁に行われていた。そのころは、大きな声であいさつをしたらまわりの大人にほめられるし、友達もみんなあいさつをしていたから当たり前のことだと考えていた。だから、自然と大きな声で進んであいさつをしていたのである。しかし、中学校に入ったころから自然とまわりが大きな声であいさつする人が少なくなってきて、大きな声であいさつするのは少し恥ずかしく感じるが増えた。また、あいさつをすることは悪いことではなくいいことだと心のなかではわかっていたが、行動するのが難しくなる時期があった。だが、そのときに委員の仕事で門のところになって、あいさつ運動を行う側になったのだ。登校する生徒に向かってあいさつをし、あいさつがかえってくると、とても気分がいいものだった。そこで私は、改めてあいさつが、とくに朝のおはようございますという言葉は、「今日1日ががんばろう」と元気がでる言葉だと気づけたのだ。それからというもの、あいさつがかえってこないような先生に対しても、しっかりとあいさつをするようになったのである。
- * 私の通っていた小学校では、あいさつ運動が行われていた。集団登校で学校へ着くと、委員会で決められた友達と先生が正門の前にたっぺいらっしやるあいさつをしていた。大きな声であいさつができた登校班は、その日の給食放送で名前を呼ばれていた。ほめられることがうれしくて、いろいろな人にあいさつをする習慣ができていた。しかし、中学生になると、部活動でかかわる先輩と仲のいい友達にしかあいさつをしなくなった。大きい声であいさつをするのが恥ずかしくなった。しかし、中学3年生のころ、生徒会の提案であいさつ運動をしようということになった。そのとき、委員長だった私は当番で、朝みんなより30分早く学校へ行って、登校してくる生徒にあいさつをしていた。正直、眠かったし、面倒くさいと思っていた。もともとあいさつができていないと先

生がおっしゃっていたのを理由にはじめたため、ほとんどの人があいさつをかえしてくれなかった。しかし、全校集会で呼びかけたり、毎日たっあいさつをしたりしているうちにかえしてくれる人が増えていった。その上、あいさつをして顔馴染みになった後輩が声をかけてくれることも増え、人脈が広がった。私たちが引退してからも、あいさつ運動は後輩たちが引き継いでくれた。とてもうれしかった。これがきっかけとなり、私は再びきちんとあいさつをするようになった。

◎小学校高学年のころから大きな声であいさつするのが恥ずかしくなっていたが、ある女子中学生との出会いでできるようになった（1名）

*小学校に入学すると、毎日門の前におじさんが2人たっていて、笑顔であいさつをしてくれた。あいさつ当番で上級生もたっていた。やはり私は、あいさつをされたらかえす、のくりかえしだった。上級生になると、まわりの友達であいさつをかえす人が少なくなった。だんだん私もかえさなくなった。大きな声で元気よくあいさつすることが恥ずかしいと思うようになっていたのだ。中学生になり、その思いはますます高まった。そのころの私は、あいさつと同様に、自分からだれかに話しかけるということもできず、授業で先生がおっしゃったように、私は人見知りですと先にいい、話しかけられるのを待つラクなポジションにたっていた。しかしあるとき、あいさつ当番で門にたっていた女の子が同級生で、「さよなら」ではなく「バイバイ」といつてくれた。それがなぜかすごくうれしくて、次の日その女の子に自分からあいさつをすると、当たり前のようにかえしてくれた。自分のなかでもあいさつはされたらかえすものだと思っていたから、それは普通のことなのかもしれない。けれど、あいさつをかえしてもらったあと、自然と笑顔になっていて、そんな些細なことがうれしかった。そこから私は徐々に自分から話しかけることに慣れていった。一番勇気のいるあいさつをすることで、交友関係も広がり深まった。

◎まわりに流されてあいさつをしていた（1名）

*小学校のときは、あいさつゲームというものをした。人に会ったとき、どちらの方が先にあいさつできるかで勝敗を決めるゲームだ。私は考案者である先生の戦略にまんまとひっかかり、毎日大きな声であいさつしたのを覚えている。中学のときは、風紀委員に属し、朝のあいさつ運動をやった。うちの中学はあいさつが伝統だったため、あいさつについてはとくに厳しく注意された。授業がはじまる際は「お願いします」を大きな声でいうのは絶対的であり、ひとりでもやらなければ何度もやらされた。

2) 中高で

続いて、中高での体験者を見てみよう。「いつからか、大きな声であいさつするのが恥ずかしくなっていた」（1名）とあるように大声をだす恥ずかしさや、「恥ずかしさやあいさつをかえしてくれない不安などもあってあいさつをしなくなっていたが、高校で再びあいさつをするようになった」が3名（2.8%）いるように高校生ではあいさつをかえしてくれない不安などがでてくるものの、高校生になると「あいさつ運動で、できるようになった」の3名（2.8%）を含め、改めてできるようになったという記述もある。

〈記述一覧〉

◎あいさつ運動で、できるようになった（3名）

*私が所属していた中学校では、生活委員会のメンバーと先生方が中心となって、あいさつ週間という、あいさつを普段よりも意識しようという運動が月1回程度行われていた。そのような期間があることによって、私も含めて生徒たちは、普段よりあいさつを心がけるようになった。また、高等学校では、生徒会の役員と先生方が、中学校と同様、定期的にあいさつ運動を校門の付近で実施していた。それまでは、あいさつはされるもの、人にいわれてするものだと考えていたが、少しずつ自分からあいさつをしようと思ひ、する人が増えていった。さまざまな人とかわることで自然と人見知りをしなくなり、だれに対しても笑顔であいさつをするようになった。

*中学校では、毎朝先生たちが校門にたち、あいさつをしてくれていた。はじめは無視することもあったけど、あいさつされることは気持ちがいいことだと知り、これからは積極的にしようと思ひ、それからは自分から先生にいわれる前にしていた。高校に入学してからは、生徒会の人も毎朝たっ先生たちもいっぱい、毎日あ

いさつ運動していた。そのおかげで、毎朝気持ちよく教室に入り、楽しく友達と話すことができた。

- * 中学校に入学し、私はバレーボール部に入った。そのときの顧問がとても厳しく、あいさつと礼儀はとくに厳しかった。その先生のおかげで、あいさつがどれだけ大切なことが気づかされた。あいさつをすることでコミュニケーションがとれ、いろんな人と話せるようになった。毎朝のあいさつ運動にも積極的に参加して、いろんな友達とあいさつをした。高校に入学して、私たちの学年目標が「気持ちのいいあいさつ」だった。気持ちのいいあいさつってどういうことか、はじめは理解できていなかった。しかし、下を向いておはようといっても、それはあいさつではない。目をみて笑顔でおはようということが気持ちのいいあいさつだと気づいた。それからは、気持ちのいいあいさつを意識しながら生活している。

◎いつからか、大きな声であいさつするのが恥ずかしくなっていた(1名)

- * 私が通っていた中学、高校では、あいさつ週間という週を決めて、生徒会の人や先生が朝に校門にたってあいさつをしていた。私は、先生がみているときは、大きな声で返事をしていた。私はいつからか、大きすぎる声であいさつをすることを恥ずかしいと思っていた。それは、まわりに大きい声をだす人がいなかったからである。

◎恥ずかしさやあいさつをかえしてくれない不安などもあってあいさつをしなくなっていたが、高校で再びあいさつをするようになった(3名)

- * 小学、中学校にあがるとなぜだかあいさつをすることが少し恥ずかしくなってきた、地域の人にも会釈だけがかえしたり、あいさつをかえさずに素通りしてしまったりしたこともしばしばあった。それと同時に、学校の先生からは「自分から進んであいさつしよう」と指導を受けた。中学校では、月に1回、あいさつ週間というものがある、風紀委員会の子たちやボランティアで集まった人たちが、朝早くから校門の前で登校してきた生徒たちにあいさつをしていたりした。高校生になると、母校の明るい雰囲気や集まった生徒の元気な性格の影響を受けてか、あいさつが恥ずかしいと感じることはなくなった。それどころか、学校の最寄り駅を降りてから、学校まで歩く道中に会うすべての地域の人たちに自分からあいさつをするまでに自分の行動は変わった。高校では、中学のときと同様、あいさつ週間があったが、中学と違った点をあげるとすれば、そのあいさつ運動に校長先生も参加していたことだ。校長先生は、とにかく陽気な人で、いつも明るく大きな声であいさつをするような人だった。生徒のなかで、校長先生よりも大きな声であいさつした方が勝ちといったゲームのようなものが流行っていた時期もあった。

- * 私があいさつに対しての考え方が変わったのは、中学生や高校生のころだ。恥ずかしいという思いと、あいさつをかえしてくれなかったらどうしようという不安から、声が小さくなったり、会釈だけでおわらせてしまったりしていた時期があった。あいさつの大切さに気づいた最初の転機は、私が通っていた中学校で所属していたバスケットボール部でのことだ。この部活では、大きな声であいさつすることが部則だった。入部した当初はすごく苦労したけれど、すごしていくうちに自然と身についていった。また、クラブ活動のひとつとして、近隣の小学校にあって、小学生の人たちといっしょにあいさつ運動も行った。そこで私は、元気なあいさつをすると、元気にあいさつをかえしてくれると学んだ。もうひとつの転機は、高校でのことだった。私の通っていた高校では、「立ちどまって笑顔であいさつする」という慣例があった。今まで、あいさつはすれ違う一瞬の出来事だったけれど、立ちどまることで相手の表情がよくわかった。このような経験を通して、あいさつは人とのコミュニケーションのなかで大切なものと再認識した。

- * 中学のころも、「あいさつを、伝統を、大切に」というスローガンもあり、校内ですれ違った人には必ずあいさつをする習慣がついていた。さらに、高校では、私のクラブの決まりで、必ず先生や先輩に立ちどまってあいさつをしていた。先輩に気づかずあいさつをしなかったら、呼びだされて怒られるときもあった。それだけあいさつには厳しかったのに、先輩は絶対、あいさつをかえしてくれなかった。3年生も2年生もかえしてくれなかった。そのときに、あいさつは強制的にやらされているもので、先輩は後輩があいさつしてもかえさなくてもよいと、勝手に思いこんだ。私も2年生になって同じことをし、それを後輩にもつなげてしまった。しかし、3年になって先輩がいなくなり、緊張感も薄れてきたころ、顧問の先生に野球のあいさつは素晴らしいといわれ、悔しく思った私の代のキャプテンが毎朝あいさつをしようといいだした。私は内心、面倒くさかった。しかし、あいさつ運動をはじめたたくさんの人とあいさつをして、隣のクラスのかかわりがなかった子や部活

関係なしに後輩とも話すようになった。そのとき、あいさつの楽しさに気づいた。

3) 小中高で

小中高、あわせて12年間もあいさつ運動を体験すると、どうなるのだろうか。最終的には、「紆余曲折はあったが、小中高12年間で習慣となっている」が4名(3.7%)というところに落ち着いている。

〈記述一覧〉

◎紆余曲折はあったが、小中高12年間で習慣となっている(4名)

- *小中高12年間、あいさつ運動のある学校だった。小学校のころはすべてに一生懸命だったので、門にたっている先生や委員会の子に元気よくあいさつしていた。中学校になると部活に入り、先輩ができ、先輩をみつけたら、どれだけ遠くても大きな声で何回もあいさつをしていた。しかし、朝、門にたっている先生やすれ違う先生には、朝は眠いやこの先生は嫌いだという言い訳をつくり、あいさつをしなかったことがある。だが、自分がクラスの委員長になり、あいさつ当番に当たった。門にたつてあいさつすると、ちゃんとかえてくれる人と無視する人がいた。あいさつしてかえてもらえないことに、すごく心が傷ついた。そのとき、自分も前までは同じく先生を傷つけていたことに気づいた。そこから、少し意識するようになった。高校に入ると、校門にたくさん先生がたつていて、あいさつを毎朝してくださっていた。私は気分屋なので、機嫌がいいときはさわやかにあいさつし、機嫌が悪いときはだまって門を通っていた。案の定、あいさつしなければ一番怖い先生にとめられ、あいさつをし、お前が暗いとこっちまで気分がさがるといわれた記憶がある。高校にもなって、まだあいさつ、あいさつといっているのか、これが私の思いだった。しかし、ふと気づくと、あいさつが自然と習慣になり、すれ違う先生や訪問者の方に自分からあいさつしていた。笑顔であいさつすると、さわやかだねと先生にいわれたとき、すごくうれしかった記憶がある。
- *小学校では、毎朝校門の前で先生が「おはようございます」とあいさつ運動をしていた。はっきりとは覚えていないが、毎朝あいさつはしていたと記憶している。そのころは、あいさつすることに対してなにか感情があったわけではなく、ただあいさつされたのであいさつをかえていた。中学校では、学校の先生に加え、生徒会の生徒も毎朝のあいさつ運動に参加していた。そのころから、私はあいさつをしなくなった。その理由は覚えていないが、おそらくそのころからまわりの生徒もあいさつしなくなっていた記憶がある。まわりがあいさつしない分、自分があいさつすると目立ってしまうのだと思い、あいさつをしなくなったのか、と今になって考える。中学時代はあいさつしてくれている人に対して、あいさつをかえてなくて申し訳ないなどの感情もなく、無視していたと記憶する。そして、高校生になった。私の学校では、月替わりで部活ごとにあいさつ運動をしなければならないことになっており、私自身もあいさつ運動をするようになった。自分があいさつする側になったとき、あいさつをしても無視されたりすることが普通にあった。自分自身があいさつをしかける方になって、あいさつをしてもなにもないかのように無視されるとすごく不快な気分になることが、はじめてわかった。とはいえ、いきなりどの人にもあいさつするのは抵抗があったため、友達やクラスメイトがあいさつしてくれた際、あいさつをかえすようになった。高校生活後半では、まったくかわりのない先生にもあいさつするようになった。
- *小学校、中学校では、あいさつ活動などが盛んで、とくに私が通っていた中学校では、とくに部活動でのあいさつに対する意識が高く、さらにあいさつを意識するようになった。また、校門の前に先生や生徒会の人がついて、ほぼ毎朝あいさつ運動をしていた。高校に入学し、中学校よりもあいさつをする人が少なくなったと感じた。あいさつをする人はちゃんとするけど、しない人もちらほらみつけるようになった。私は、それがすごくイヤだった。しかし、高校でも生徒会の人や先生があいさつするあいさつ週間のような活動があって、それを機に中学校であいさつの習慣がなかった人もあいさつをするようになって私はうれしくなった。
- *私が「あいさつ」と聞いて真っ先に思い浮かぶのは、小学校のときのあいさつ運動である。月に1回、マナーアップ期間と称して委員会の代表が校門前にたち、登校してくる児童にあいさつをするというものがあった。もちろん、小学校だけではなく、中学、高校とそういった期間はあったが、なぜ小学校のマナーアップ期間が真っ先に思い浮かぶかというと、本当に気持ちのいいあいさつができていたのはそのころだけだったのではな

いかと考えるからである。小学校のころはだれにでも大きな声でハキハキとあいさつし、校門前にたつ委員にもしっかりとあいさつをかえしていた。それが中学校にあがったところから、「大きい声であいさつや返事をすることは少し恥ずかしいこと」のような認識が広まり、徐々にあいさつの声は小さくなっていった。自分もそのひとりであった。だからこそ、今、小学校のときのあの気持ちのいいあいさつが思い浮かぶのである。大人になった今、それを思いだして、またしっかりとあいさつをかえせるようになってきた。おかげで、あいさつをしたあと、気持ちのいい1日がすごせることにも気づいた。これからも、小学校のときのあのハキハキとした元気なあいさつを思いだして、今の自分もあのようなあいさつができるように、少しずつ変えていきたいと考えている。

IV. クラブ活動と部活動～『学習指導要領』上の位置づけ

続いて、「小学校のクラブ活動」と「中学校・高校における部活動」に焦点を当てることにする。まずは、それぞれの活動について、平成29(2017)年度の大学新入生が小中高の学校生活を送った時代の学習指導要領上の位置づけを押さえておきたい。

1. 小学校のクラブ活動

◎小学4年生

小学校のクラブ活動は、4年生時に適用されていた平成10(1998)年度改定の『小学校学習指導要領』では、Ⅱの2に1)でもとりあげたが、「あいさつの教育」に直接関連するような基本的な生活習慣の形成や望ましい人間関係の育成に関する内容は記載されていない。

授業時間は「内容に応じ、年間、学期ごと、月ごとなどに適切な授業時数を充てるものとする」とされ、対象学年は「学年や学級の所属を離れ、主として第4学年以上の同好の児童をもって組織するクラブにおいて、共通の興味・関心を追求する活動を行うこと」とされている。

指導の際の配慮として、計画作成にあたっては「学校や地域の実態等を考慮しつつ児童の興味・関心を踏まえて計画し実施できるようにすること」とされ、また内容の取扱いについては「指導内容の特質に応じて、教師の適切な指導の下に、児童の自発的、自治的な活動が効果的に展開されるようにするとともに、内容相互の関連を図るよう工夫すること」とされている。

なお、クラブ活動は特別活動の一領域として必修となっているが、2002年度から土曜日がすべて休業日になったことにともない、毎週のクラブ活動の時間が月1時間程度に削減される学校が増加し、その運営も変則的になっている。

◎小学校5,6年生

続いて、5,6年生時に適用されていた平成20(2008)年度改定の『小学校学習指導要領』では、クラブ活動の目標として、新たに「クラブ活動を通して、望ましい人間関係を形成し、個性の伸長を図り、集団の一員として協力してよりよいクラブづくりに参画しようとする自主的、実践的な態度を育てる」ことが掲げられ、「あいさつの教育」に関連する記載がなされた。

内容は、前回の改定と同じく「学年や学級の所属を離れ、主として第4学年以上の同好の児童をもって組織するクラブにおいて、異年齢集団の交流を深め、共通の興味・関心を追求する活動を行うこと」とされていたのに加え、内容を明確にして活動の充実を図るために、新たに「クラブの計画や運営」、「クラブを楽しむ活動」、「クラブの成果の発表」の3つの内容が示された。

また、指導の際の配慮として、内容の取扱いについては「指導内容の特質に応じて、教師の適切な指導の下に、児童の自発的、自治的な活動が効果的に展開されるようにするとともに、内容相互の関連を図るよう工夫すること」とされていたのに加え、今日的な課題をふまえて、新たに「よりよい生活を築くために集団としての意見をまとめるなどの話し合い活動や自分たちできまりをつくって守る活動、人間関係を形成する力を養う活動などを充実するよう工夫すること」の文言が追加されている。

なお、授業時間と指導の際の配慮としての指導作成の配慮事項は前回の改定と同じである。

2. 中学校・高等学校の部活動

中学校・高校における部活動は、中学校では平成10（1998）年度改定の、高等学校では平成11（1999）年度改定の『学習指導要領』で、必修のクラブ活動（部活動）に関する規定は削除されて廃止された。

しかし、平成20年1月の中央教育審議会の答申で「生徒の自発的・自主的な活動として行われている部活動について、学校教育活動の一環としてこれまで中学校教育（あるいは、高等学校教育）において果たしてきた意義や役割を踏まえ、教育課程に関連する事項として、学習指導要領に記述することが必要である」との指摘を受け、当該学生たちに適用される平成20（2008）年度改定の『学習指導要領』では、その内容について総則にて「スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること」とされている。

『学習指導要領解説 総則編』では、答申の指摘をふまえ、生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動について、「スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養、互いに協力し合っ て友情を深めるといった好ましい人間関係の形成等に資するものである」との意義が書かれ、「部活動を実施するに当たっては、本項を踏まえ、生徒が参加しやすいように実施形態などを工夫するとともに、休養日や活動時間を適切に設定するなど生徒のバランスのとれた生活や成長に配慮することが必要である」とされている。また、「学校同士の交流としては、例えば、近隣の学校と学校行事、部活動、ボランティア活動などを合同で行ったり、自然や社会環境が異なる学校同士が相互に訪問したり、コンピュータや情報通信ネットワークなどを活用して交流したり、特別支援学校などとの交流を図ったりすることなどが考えられる。これらの活動を通じ、学校全体が活性化するとともに、生徒が幅広い体験を得、視野を広げることにより、豊かな人間形成を図っていくことが期待される」と記されている。

『中学校学習指導要領解説 特別活動編』の「学級活動の内容」の「望ましい人間関係の確立」では、「小学校時代に比べ、子どもたちを取り巻く人間関係も、学級を中心とした友達という関係に加え、学年の中での人間関係、さらには部活動などにおける先輩・後輩という人間関係なども生まれてくる。また、生徒会や地域の集団などの活動を通して、人間関係もより広がりをもって来る。これら様々な人間関係について振り返らせ、その集団の中での行動の仕方や生き方について考え、望ましく円滑な人間関係の確立に資するようにすることが大切である」とされている。

それから、『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』の「生徒会活動の内容」では、「部活動は、学校教育活動の一環として、スポーツや文化、学問等に興味と関心をもつ同好の生徒が、教職員の指導の下に、主に放課後などにおいて自発的・自主的に活動するものであり、生徒会活動においても部活動に留意することが望まれる」とされている。

また、Ⅱの1の2)でもとりあげたが、『中学校学習指導要領解説 道徳編』では、部活動で礼儀を正しくふるまう必要性が記されている。

V. クラブ活動や部活動が児童・生徒に与えた影響～「あいさつの自分史」の内容分析

では、クラブ活動や部活動は、実際子どものあいさつ行動にどんな影響を与えたのだろうか。

1. 体験者数

クラブ活動や部活動であいさつの指導を受けた人は、どれくらいいるのだろうか。全体的にみると、小学校でのクラブ活動体験者は1名（0.9%）、中学での部活動体験者は26名（24.1%）、高校での部活動体験者は13名（12.0%）となっていた。活動体験者は小学校ではほとんどおらず、中学ではだいたい4人に1人が、高校では8人に1人という数字がでている。これら以外に、学校段階が明示されていないものが1名（0.9%）いた。

このうち、特定の学校段階でのみ体験した人は、小学校のみが1名(0.9%)、中学のみが20名(18.5%)、高校のみが7名(6.5%)であった。また、複数の学校段階で体験した人は、中高で6名(5.5%)となっていた。

2. 特定の学校段階でのみの体験者の場合

まずは、クラブ活動や部活動を特定の学校段階でのみの体験した人の記憶をたどってみよう。

1) 小学校のクラブ活動の場合

小学校のクラブ活動の事例は1例のみで、クラブの先生に「クラブ活動ができるだけではない」といわれたものが1名(0.9%)ある。

ちなみに小学校での体験者による記述が少ないのは、小学校4年生まで適用されていた『学習指導要領』(平成10年度版)から、クラブ活動は授業の一環として計画的に開設する必要がなくなったため、かつては週に1回、年間35回以上あった活動をしなくてもよくなり、月1時間程度の実施にとどまる学校が増えていることが影響しているようである。

〈記述一覧〉

◎クラブ活動ができるだけではない(1名)

*私がいさつについて意識するようになったのは、小学5年生のときである。それまでは、どちらかというと引っ込み思案の恥ずかしがり屋な性格で、母の後ろに隠れているような子だった。そんな私が陸上競技クラブに入ると、友達もたくさんできて、いろいろな人と話せるようになった。それは陸上競技クラブの先生が、「あいさつができない人は、練習をどれだけしても無駄だ」とよくいっていたため、私は自然にあいさつをするように心がけるようになっていた。最初は、陸上競技をする上であいさつなんてまったく関係がないと思っていた。しかし、みんなで協力してひとつのスポーツをしていくのに、声をだすことは必要不可欠だと感じた。改めて考えると、リレーでバトンをあわせるときや長距離を走っていてしんどくなったとき、声をだすことは多い。声をだすことによってモチベーションもあがり、成績もあがっていった。このようにあいさつをして声をだす癖をつけていることで、自然と声をかけあえるようになった。

2) 中学での部活動の場合

中学校の部活動の場合、「顧問の先生の指導であいさつが定着」(3名)や「先輩の指導であいさつが定着」(1名)とあり、さらに「部活動で定着(運動部や吹奏楽部などで)」(11名)を指摘する声が多いように、運動会系・音楽会系での先生や先輩の指導によるところが大きい。

だが、「思春期を迎え、部活動の仲間内でしかあいさつをしなくなった」(2名)のように、たとえ部活動であっても一般学生と同じように活動が仲間集団にとどまる事例の報告もある。また、「あいさつしろという先輩にしてもかえしてくれず、あいさつをしなくなった」(2名)という例もあるように、口先だけの指導だと反発がでている。

〈記述一覧〉

◎顧問の先生の指導であいさつが定着(3名)

- *中学校に入学し、私はバレーボール部に入った。そのときの顧問がとても厳しく、あいさつと礼儀はとくに厳しかった。その先生のおかげで、あいさつがどれだけ大切なことが気づかされた。あいさつをすることでコミュニケーションがとれ、いろいろな人と話せるようになった。
- *中学校にあがり、部活でも「テニスができるようになるよりも前にあいさつができるように」と指導されたりし続けた。そのおかげで私はあいさつの気持ちよさを知り、みんなにあいさつをしたりするようになった。
- *中学校のときは、部活で先生に、「他校での練習試合など特別な状況じゃなくても、普段の生活からしっかりとあいさつはするべきだ。普段からあいさつできない人が、外でもできるはずがない」と厳しくいわれてきた。

◎先輩の指導であいさつが定着（1名）

- *中学生になると、先輩という存在の人が身近にできた。小さいときはあいさつを両親に教わったが、今度は先輩にあいさつの仕方を教えてもらったのである。今までは「おはよう」「こんにちは」というあいさつを使うことがほとんどだったが、「すみません」というあいさつもこのころはよく使ったかもしれない。目上の人に対して、なにかわからないことを尋ねるときや部活動などで自分が失敗をしたときなどである。

◎部活動で定着（運動部や吹奏楽部などで）（11名）

- *中学校に入り、部活に所属しはじめてから、私の今のあいさつの形（当たり前にあいさつすること）が定着した。私はテニス部で、他の生徒よりなおさら大きな声で先生方や先輩にあいさつをしないと呼びだされたりなんてことが、しばしばあった。
- *中学生になり、テニス部に入った。部活のきまりで、学校で先輩をみかけたら、必ずあいさつをすることになっていた。私はいつも先輩がいないかまわりを見渡し、みつけたら頭をさげあいさつをした。今思えば、心のこもっていない義務的なあいさつだったと思う。こんなふうには、私は昔からあいさつをする習慣がついていた。
- *中学のころに入っていたバレーボール部がきっかけであった。バレーボールは声をだしてプレイするスポーツなため、普段のあいさつも大切といわれ続けていたものだった。たとえば、学校内で学校の先生や顧問の先生、先輩と会ったときや体育館を入るときにも、「お願いします！」とあいさつが必要であった。私のなかでは、部活に入ったことが一番のあいさつをするきっかけとなり、そこであいさつの大切さを知った。
- *中学生のとき、私はテニス部に入っていた。運動部はあいさつをきちんとしていて、すれ違った先生や先輩にあいさつをしなければならぬ。はじめ、それがすごくイヤだった。なぜかはわからないけど、たぶん大きな声であいさつをすることに恥ずかしいという気持ちがあったのだと思う。でも、毎日していくうちにそれが当たり前になった。先生や先輩とすれ違ったら、当たり前にあいさつをしていた。
- *中学生になると相手の状況や、場の空気感を考えるようになった。なにより一番影響したことは、部活動である。自分は運動部に所属していたため、上下関係が厳しく、とくにあいさつが重要だった。当時は、どんな怪物よりも顧問と先輩が怖かった。そのため、その癖は今でも残っており、先輩や目上の人に会うと反射的に目をあわせ、言葉がでてくるようになっている。
- *中学校では、運動部であったこともあり、あいさつをしていた。そのうち、あいさつは意識してするものではなく、自然にするものとなっていた。
- *中学時代、私は吹奏楽部に所属しており、その部活はとにかく上下関係が厳しく、とくに生活面での指導に力をいれていた。掃除を時間いっぱいすること。身のまわりをきちんと整理すること。大きな声であいさつをすること。これらは、部員が守らなければならない約束だった。私はそれまで「あいさつは大事だ」とは思っていたが、いざあいさつするとすると、恥ずかしくてなかなか声をだせなかった。だから、先輩によく呼びだされて注意されていた。注意されるのがイヤだったからという理由はあまりよくないのだろうけれど、私はできるかぎり大きな声であいさつをするようにした。最初のうちは恥ずかしかった。あいさつするには勇気が必要だった。だが、だんだんと慣れていくことで、最終的にはなんとも思わなくなった。当たり前のようにあいさつができるようになっていた。この体験は今になって思えば、大切なことだったのだろうと思う。
- *私があいさつについてもっとも深く意識したのは、中学生のときだ。当時私は、運動部に所属していた。運動部というだけであいさつや礼儀に厳しいように感じるが、事実あいさつや礼儀に対して厳しかった。私はそこで、あいさつについて学んだ。それは、先輩や先生に教えてもらったわけではなく、まわりが大きな声でだれにでも元気よくあいさつをするので、私も自然と大きな声であいさつするようになったように思う。また、私の通っていた中学校の吹奏楽部は私が所属していた部活よりもあいさつについて厳しかった印象を受ける。なぜなら、彼らは部活がはじまる前に必ずあいさつを大声で叫ぶからだ。部長が「おはようございます」といえば、部員がそれに続けて「おはようございます」と続く。朝になると必ず聞こえてくるこの声には負けられないように大きな声であいさつをしてやると闘争心が燃え、より大きな声であいさつをするようになった。
- *私が通っていた中学校では、とくに部活動でのあいさつに対する意識が高く、さらにあいさつを意識するようになった。
- *中学校では、部活動に入部し、先輩後輩の関係を知った。「お疲れ様です」「失礼します」などのあいさつをす

るようになった。

- * 中学校になると部活に入り、先輩ができ、先輩をみつけたら、どれだけ遠くても大きな声で何回もあいさつをしていた。

◎思春期を迎え、部活動の仲間内でしかあいさつをしなくなった (2名)

- * 中学生になると、部活動でかかわる先輩と仲のいい友達にしかあいさつをしなくなった。大きい声であいさつをするのが恥ずかしくなった。
- * 中学生になって思春期を迎えるとともに、だんだん家族にあいさつを交わすことも少なくなった。学校でも、担任や部活の顧問の先生や先輩方以外にあいさつをすることが少なくなっていた気がする。

◎あいさつしろという先輩にしてもかえしてくれず、あいさつをしなくなった (2名)

- * 中学2年生にあがるころには、やめてしまっていた。部活動で先輩方から「あいさつは必ず先輩より先に後輩が率先してということ」といわれ、あいさつをするのはいいが、ほとんど返事はかえってこなかった。その経験から、「あいさつ=気持ちがいいもの」から「あいさつ=ダルイもの」と考えるようになってしまったのも原因のひとつであるとする。
- * 中学校での話ではあるが、やはり上下関係は厳しかった。先輩へあいさつしても、薄ら笑いくらいの反応が多かった。なんでもっとちゃんとかえしてくれないのだろうと思っていたが、自分が先輩になって後輩にあいさつされると、同じような反応をしてしまった。元気よくあいさつされると照れくさいというか、少し引いてしまうのだ。

3) 高校での部活動の場合

ここでは、「部活動でしたあいさつ運動で定着」が3名(2.8%)いるように、「部活動」と「あいさつ運動」の二大プッシュで、あいさつができるようになったという報告がでている。

また、「時と場をわきまえたあいさつが定着」が1名(0.9%)いるが、時と場の問題は『学習指導要領解説 道徳編』には小学校中学年では「時と場をわきまえた態度へと深めていく必要がある」とあり、また高学年では「時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する」と記述され、さらに中学校では「礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる」と記載されているが、高校の部活動でそれらがやると現実のものとして実を結んでいる様子が窺える。

それから、第三者的視点から「運動部の生徒はあいさつをしていた」と記載していた人が1名(0.9%)いた。

〈記述一覧〉

◎部活動でしたあいさつ運動で定着 (3名)

- * 高校生になった。私の学校では、月替わりで部活ごとにあいさつ運動をしなければならないことになっており、私自身もあいさつ運動をするようになった。自分がいさつする側になったとき、あいさつをしても無視されたりすることが普通にあった。自分自身がいさつをしかける方になって、あいさつをしてもなにもないかのように無視されるとすごく不快な気分になることが、はじめてわかった。とはいえ、いきなりどの人にもあいさつするのは抵抗があったため、友達やクラスメイトがいさつしてくれた際、あいさつをかえすようになった。高校生活後半では、まったくかわりのない先生にもあいさつするようになった。
- * 私の高校は、毎月部活動が順番に替わって朝の校門の前につけて、あいさつ運動を行っている。私も実際に行ったことや受けたことがある。最初はあまり生徒たちもあいさつしても反応がかえってこなかったが、自分たちも笑顔であいさつをしているうちに、かえしてくれる生徒が増えていった。私がいさつを受ける立場になったときも、面倒くさそうにしている生徒より、笑顔であいさつをしている方が気持ちも明るくなった。
- * 高校では、私のクラブの決まりで、必ず先生や先輩に立ちどまってあいさつをしていた。しかも、肩にカバンをかけているなら、それを肘までおろすというルールもあった。先輩に気づかずあいさつをしなかったら、呼びだされて怒られるときもあった。それだけあいさつには厳しかったのに、先輩は絶対、あいさつをかえしてくれなかった。3年生も2年生もかえしてくれなかった。そのときに、あいさつは強制的にやらされているもので、先輩は後輩がいさつしてもかえさなくてもよいと、勝手に思いこんだ。私も2年生になって同じこと

をし、それを後輩にもつなげてしまった。しかし、3年になって先輩がいなくなり、緊張感も薄れてきたころ、顧問の先生に野球のあいさつは素晴らしいといわれ、悔しく思った私の代のキャプテンが毎朝あいさつをしようといひだした。私は内心、面倒くさかった。しかし、あいさつ運動をはじめたくさんの人とあいさつをして、隣のクラスのかかわりがなかった子や部活関係なしに後輩とも話すようになった。そのとき、あいさつの楽しさに気づいた。

◎時と場をわきまえたあいさつが定着（1名）

*私のなかで印象に残っていることをあげるとするならば、高校生のときである。私はマネージャーとして、野球部に所属していた。野球部といえば、あいさつや礼儀にとくに厳しいと思われがちであるが、まさにそのとおりだった。言葉遣いが乱れていると、先輩に注意されるのはよくあることであった。そんな毎日のなかで、私のなかで小さな変化があった。それは、先にグラウンドを去る先生方や先輩にかけるといわれるあいさつ（いわゆる別れのあいさつ）である。「さようなら」ではなく、「失礼します」なのだ。一般的に考えると、どうってこともないかもしれない。けれど、小中とそんな言葉を「さようなら」の代わりに使っていなかった私にとっては、変化であった。

◎運動部の生徒はあいさつをしていた（1名）

*高校に進学すると、あいさつをする機会は減った。運動部の生徒や生徒会などはきちんとしていた。

4) 中高での部活動の場合

6年間にわたる中高での部活動では、あいさつが定着したという報告が大半で、「顧問の先生の指導であいさつが定着」が1名（0.9%）、「部活動で定着」3名（2.8%）、「部活動で部長になって定着」が1名（0.9%）などとなっていた。

だが、高校生になるとあいさつをかえしてくれない不安が募るなか、「部活で怒られるからあいさつしていたが、ある日、ある先生があいさつをかえしてくれなかったのがきっかけでしなくなった」が1名（0.9%）いるように、イヤイヤあいさつしている上に、不安が現実のものとなってあいさつをしなくなったことが報告されている。「義務によって促された挨拶は、返礼としての挨拶を相手に要請する」と矢野は指摘した⁶⁾が、返礼が裏切られると義務感が崩れることの証だろう。

〈記述一覧〉

◎顧問の先生の指導であいさつが定着（1名）

*私は中学から吹奏楽部に入っており、あいさつをよく注意されるようになったのはそのころからである。とくに高校では全国大会常連校の部活だったのだが、音楽面以上に顧問からいわれたことは、やはりあいさつである。「いくら演奏がうまくても、礼儀、あいさつができない部活は、真の強豪校ではない」というのが、いつも口うるさくいわれてきた言葉だ。吹奏楽部は、演奏会などでたくさんのコンサート会場を訪れるので、その会場のたくさんの方々にお世話になる。なので、その人たちに少しでも感謝の気持ちを伝えるためには、やはりあいさつが必要だと思う。そして、人のイメージも、あいさつひとつでとても変わらると思う。たとえば、先輩に対していつもきちんとあいさつをする後輩は、それだけでとても感じよく思う。あいさつをすることは、その人のイメージが左右されるくらい大切なことなのだ、中学から高校までの6年間で学んだ。

◎部活動で定着（3名）

*中学では、興味があった部活に入部をして、その部活の先輩や同級生と関係をもつようになった。先輩方はすぐ明るく気さくな方ばかりで、部活以外の時間に廊下などですれ違ったとき、あいさつをすれば必ずかえしてくれた。その姿をみて、「あいさつ」とは、年齢に関係なく、人と人をつなぐものだと理解した。高校では、中学校時代の先輩に教えていただいたことを忘れないで、自分から恐れずにあいさつをして人間関係をつくっていきたくて思っていた。高校では部活をかけもちして、それぞれの場所で仲間をつくることに成功した。

*中学校のときは軟式テニスを、高校ではアメフト部のマネージャーをしており、常にあいさつをどこにいてもするよういわれてきた。なので、私にとってあいさつとは、心がけるといふより、自然と当たり前にするものだ。

* 中学で、私は上下関係が厳しいバスケットボール部に入部した。私の通っていたのは中高一貫校で、5つ上の先輩もいるため、あいさつなどの礼儀をしっかりと叩きこまれ、自然と当たり前になっていった。はじめは、怒られると思いあいさつしていたことも多少あったが、あいさつをしないことは失礼に値するし、なにより自分がしないと気分が悪かった。

◎部活動で部長になって定着(1名)

* 私は、中高一貫校に通っていた。私があいさつするようになったのは、高2からだ。学校のなかで一番厳しいといっても過言ではないバド部に所属した私は、規則の厳しさにとまどった。これまで、あいさつのことなんてまったくいわれることのなかった私にとって、そこは別世界だった。正直、中学生のときは、規則だから先生方や先輩、来賓者にあいさつをしていた。しかし、高2で部長になって自分がチームを引っ張る上でなが必要か考えたとき、基本的だが今までやらされてきたあいさつだと気づいた。はじめは知らない人にあいさつしても、この人だけだっけ…とか恥ずかしいと思う気持ちが勝っていた。けれど、もう自分は最上学年だから、後輩の模範となれる先輩にならなくてはいけないと思った。それから、私は学校ですぐ先生方や来賓者に自ら進んであいさつをするようになった。すると、驚いたことに、みんな無視をせずに笑顔でかえしてくれる。それだけでない。そこから、よくでくわす先生は、「最近、部活どう？」など話を展開させてくれる。そのときに、私は気づいた。あいさつは人を笑顔にし、気分よくさせてくれる魔法ということに。そして、私は毎日でくわす人にあいさつをしなければいけないではなく、勝手にあいさつの言葉がでてくるようになった。友達といるときに先生や来賓者にあいさつするなんてと思っていたが、あいさつすることが当たり前になっている私は恥ずかしげもなくあいさつできるようになった。

◎部活動で怒られるからあいさつしていたが、ある日、ある先生があいさつをかえしてくれなかったのがきっかけでしなくなった(1名)

* 中学校、高校の部活動では先輩に、「あいさつをしない」と怒られもした。そのため、私は近所の人や学校の先生、先輩には、大きな声であいさつをするようにしてきた。それを高校3年生のある日まで続けていた。その日、私はいつもどおり先生にあいさつをした。学校の先生だし、かえしてくれると思ったが、先生はかえしてはくれなかった。私はそれがすごくイヤで、それからあいさつをしなくなった。

5) 学校段階が明示されていないもの

おそらく高校時代を回顧しての記述だと思われるが、あいさつをかえしてくれないことを不安が募るなか、「あいさつをかえしてくれるという安心感がある部活動の仲間内でしか、あいさつができなかった」が1名(0.9%)いた。

〈記述一覧〉

◎あいさつをかえしてくれるという安心感がある部活動の仲間内でしか、あいさつができなかった(1名)

* スポーツクラブや部活動など、自分からのあいさつを重要視される環境にいたころは、恥ずかしいという感情はなかった。そこでは、「しなければならぬ」という約束や規則のような認識が、学校や地域でのそれより強くあった。なにより相手が目をみて、とてもしっかりとしたあいさつをかえしてくれるという安心感があったことも大きいだろう。しかし、その組織を抜けてしまえば、自分からあいさつをするというのは、とても勇気がいることになってしまう。されれば、きちんと目をみてかえすように心がけてはいるが、なかなか自分からしようという勇気はでなかった。

V. まとめと今後の課題

1. まとめ

全体的にみて、いえることはなんだろうか。まず、あいさつ運動があつたり、部活動に参加したりすることであいさつができるようになり、定着するケースが多いことである。

だが、小学校高学年ぐらいから中学にかけて思春期を迎えるころになると、大きな声であいさつすることの恥

ずかしさやまわりに流されてあいさつをしなくなりがちになる。さらに、自分からあいさつしても、相手からあいさつがかえってこないこと（無視されること）を恐れるようになる。あいさつをされればあいさつをするが、自分からはしなくなり、あいさつが形骸化していく。

以後、道は2つにわかれる。最初の道は、その時点から再び自分からあいさつできるようになることに続いている。そこに向かうには、3つの道筋がありそうである。ひとつ目は、あいさつ運動で自分があいさつする側になったのをきっかけに、最初はイヤイヤながら表面的に形式的にあいさつをするものの、次第に自分からあいさつすることの気持ちよさなどに目覚めたり、心を通わせたりしていくパターンである。2つ目は、あいさつをするのにあいさつの返礼（見返り）を必要としなくなる場合で、これは矢野のいう「純粹贈与」として留保なく自己を相手にさしだしているときといえるかもしれない⁷⁾。3つ目は、あいさつをきっかけに自分の人生に大きな影響を与えることになる「重要な他者」と出会い、その人のようにあいさつをしたいということであいさつをするようになる場合である。

もうひとつの道は、その後、ずっとあいさつをしなくなるパターンである。あいさつ運動や部活動がなければ、一般生徒はなかなかあいさつをしなくなる。では、あいさつ運動や部活動をすればいいのかというと、そうでもない。たとえあいさつ運動にとりくんだとしても、クラスや全校を巻きこんでの積極的なとりくみでもなければ、あいさつされても無視したり、かえすとしても会釈をするぐらいになったり、あいさつをされればするけど自分からはしなくなったりしてしまいがちである。部活動では、部活内ではいわれるからやるけれど、部活外では一般生徒同様の行動パターンになったり、先輩はあいさつしろというのに後輩にはあいさつをしないとすると互酬性が崩れたとばかりにあいさつをしなくなったりしてしまう。

2. 今後の課題

教育は、「他律」という他者に保護された状態から、「自律」という自分を自分でコントロールする「自立」を促す行為である。だとすれば、小学校、中学、高校、大学と学校段階をあがっていくにつれ、あいさつも、小さいころのように人にいわれてするものから、自分からやるものに変えていく必要がある。その際、言葉的にみても、「挨」は押す、「拶」は迫るという意味があり、「挨拶」のものは「一挨一拶」という言葉で、禅宗で、問答によって、門下の僧の悟りの深浅をためすこと⁸⁾の意であることを考えると、自分から積極的に相手に向かっていくこと、切りこんでいくことが重要となる。

ところで、大きな声をだす恥ずかしさや、相手からの返事がかえってこないことを恐れて、自分からあいさつしようとしなない若者が増えている。あいさつをしない若者の口癖に「私、人見知りです」とか「私、コミュ障です」がある。あらかじめあいさつを自分からしなくてもいいように言い訳することで、相手からのあいさつを促す方略を選択している。これでは、よりよいコミュニケーションをするどころか、そもそもコミュニケーションすることすらできず、望ましい人間関係すら築けなくなってしまう。

この問題は、人間関係にとどまらない。青木は、あいさつには、動物的な次元、社会的次元、超越的次元の3つが存在していると指摘した⁹⁾。たとえば、あいさつは、動物的次元では敵意がないことを示し、社会的次元では相手の注意を喚起したり、アイデンティフィケーションを得るために行われたり、常にある他者とのある不確かな関係におかれている不安を消去したりするために行われ、超越的次元では礼拝のように人間を超えた存在に対して畏敬の念を示すために行うが、自分からはあいさつをしないという選択は人間関係などの社会的次元だけでなく、動物的次元や超越的次元でも問題を抱えるようになってしまう。また矢野は、正しい礼儀作法は、円滑な人間関係を生みだすだけでなく、世界との調和的關係を実現し、宇宙とのリズム的な呼応關係を生みだすとしている¹⁰⁾が、それも不可能になってしまう。

今、新たに若者のマナー教育の必要が叫ばれるなか、青少年向けの新たな「あいさつの教育」のプログラム化が必要になってきているのは明らかである。学校から仕事・社会へのトランジション課題¹¹⁾¹²⁾のひとつとして、青少年が自分からはあいさつをしないという学校文化圏に居着かず、次のステップにしっかりと入って適応しているように、学校教育の育成課題として「あいさつの再社会化問題」が今後の課題となっている。

ところで、この1、2年の間のことだが、「あいさつの教育」をめぐる2つのことが話題を呼んだ。ひとつ目は、平成28（2016）年秋に『神戸新聞』の読者投稿欄の『イイミミ』に掲載された、住民同士の「あいさつ」を

めぐる投書である。「あいさつの教育」の在り方をめぐってその後大きな波紋を呼んだこの投書は、11月4日付の『神戸新聞』夕刊に「◆理解に苦しんでいます」という題で紹介された。それによると、マンションの管理組合理事の話として、マンションの住民総会で小学生の子どもをもつ親が「(子どもに)知らない人にあいさつされたら逃げるように教えているので、マンション内ではあいさつをしないように決めてください」と発言したのに対して、総会に出席していた年配の住民も「あいさつが返ってこないのが気分が悪かった。お互いにやめましょう」と賛同し、最終的にあいさつ禁止が決定してしまったという。「あいさつの教育」はするものだという常識を疑うという、教育の根本にかかわる問題だけに衝撃は大きかった。

2つ目は、「あいさつの教育」をめぐって波紋を呼び、現場を震撼させたある殺人事件の発生である。それは、平成 29 (2017) 年 3 月に起きた千葉県松戸市で起きた小 3 女児殺害事件で、通学路などで児童の登校を見守る活動をほぼ毎日していた人が容疑者として逮捕された。朝日新聞では、「今市の事件など受け、子どもの安全に対する意識は全国で高まったといわれる。文部科学省によると、全国の小学校で登下校中に保護者やボランティアが同伴していたのは、06 年度には 46% だったのが、15 年度は「見守り」を含めて 89% に上がった。しかし、今回の事件を受けての対策をすぐに打ち出すことは難しく、松野博一文科相は 4 月 18 日の会見で、「捜査を踏まえて必要に応じて検討したい」と述べるにとどまった。文科省の担当者は「見守り活動が抑制されてしまわないか心配だ」と話し、通知などを出すことが逆に、活動の見直しにつながる可能性を懸念する」と報じられた¹³⁾。これらの出来事は、子どもの安全をだれがどう守るのか、いったいだれをどう信じたいのかを問うこととなった。

ここでは、「あいさつの教育」において「子どもの安全」という新たな文脈の登場を受け、現代社会におけるあいさつの社会的機能を明らかにするとともに、道徳性を高める実践活動として家庭や学校、地域社会の連携において一体となってすすめていく「あいさつ運動」の今後のあり方が問われている¹⁴⁾。

注

- 1) 読売オンライン (<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2004/0702/006226.htm>)
- 2) 『教育課程部会におけるこれまでの審議の概要 (検討素案)【反映版】』(第 54 回中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の資料) (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/07092002/001/004.htm)
- 3) 加野芳正編『マナーと作法の社会学』東信堂, 2014, pp.vii-viii & p.248
- 4) 加野芳正編『同上書』, pp.11-20
- 5) 苦野一徳「図書紹介 加野芳正編著『マナーと作法の社会学』矢野智司編著『マナーと作法の人間学』『教育学研究』84 (3), 2017, p.45
- 6) 矢野智司『贈与と交換の教育学—漱石、賢治と純粹贈与のレッスン』東京大学出版会, 2008, p.256
- 7) 矢野智司『同上書』, p.257
- 8) 『Japan Knowledge』の「デジタル大辞泉」「日本国語大辞典」の項を参照。(<http://japanknowledge.com/lib/search/basic/index.html?q1=%E6%8C%A8%E6%8B%B6&r1=1&phrase=0&sort=1&rows=20&pageno=1&s=s>) (2017 年 10 月 7 日閲覧)
- 9) 青木保『儀礼の象徴性』岩波現代文庫, 2006, p.26
- 10) 矢野智司『前掲書』, p.246
- 11) 溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂, 2014, pp.45-49
- 12) 溝上慎一編『高等学校におけるアクティブラーニング—理論編』東信堂, 2016, pp.10-14
- 13) 「見守り, それでも続ける 千葉事件地元「信用できる大人がいる」『朝日新聞』2017 年 4 月 19 日
- 14) ところで、教員の長時間労働が問題になるなか、教員の業務の適正化・役割分担について検討が求められている。そこで文部科学省は、平成 29 (2017) 年 8 月 29 日に開催された中央教育審議会の「学校における働き方改革特別部会」(第 3 回)で配布された資料で、学校以外の家庭や地域との連携について、教師の労働時間を減らす目的で、あいさつ運動への直接的言及はないが、これに関連する登下校時の見守り活動について、明確な法的根拠がないため、必ずしも学校が直接に担わなければならないものではないとし、保護者や地域住民らがすべき仕事に位置づけている (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/siryo/_icsFiles/afieldfile/2017/09/01/1395044_1.pdf)。今後の家庭や学校、地域社会の連携の行方を見守りたい。